

科 目 名	(新)教職論(前期・後期)半期完結	担当者名	鳥谷部 志乃恵
-------	-------------------	------	---------

講 義 の 目 標	<p>教職の意義や教師の役割、職務内容に関する学習を通して、教員免許状を取得しようとする教職課程履修者が、教師という仕事はどんな仕事なのか、自分は教師に向いているのだろうか等を多角的に考察する機会をもつことができることを目標とする。</p>		
講 義 概 要	<p>教師になるために必要な学習内容、教師の仕事の内容、教師に求められている資質・能力、大学における教員養成と教育委員会等の教員採用の実態、教師の待遇や研修等について学習する。</p>		
使 用 教 材	テ キ ス ト	<p>「教職入門 教師への道」 吉田辰雄 大森 正 編著 図書文化</p>	
	参 考 文 献	<p>「教師が壁をこえるとき」 石井順治・牛山栄世・前島正俊 著 岩波書店</p>	
評 価 方 法	<p>テキストの予習を前提に課題を提示し、それについてのレポートの提出を求める。レポートは学習内容のまとまりに応じて提出することになるので、それらのレポートを総合評価する。</p>		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	<p>テキスト及び教職論のためのノートを必ず持参して受講すること。講義を聴くことだけではなく、自ら考え、それらをまとめ、文章化する作業を重視する。</p>		

1. 教職課程で学ぶこと
2. 最近の子どもの生活
3. 最近の学校の中の子ども
4. 教師の仕事（学習指導）
5. 教師の仕事（生徒指導・教育相談・進路指導）
6. 教師の仕事（学級経営）
7. 教師に求められる資質・能力（これまでの教師には何が求められてきたのか）
8. 教師に求められる資質・能力（いま教師には何が求められているのか）
9. 教師に求められる資質・能力（学ぶことと教えること）
10. 教員養成の制度・教職課程の仕組みと内容
11. 教員の採用・任命
12. 教員の地位と身分・待遇と勤務条件・研修

科 目 名	(新)教職論(前期)	担当者名	川 村 肇
-------	------------	------	-------

講 義 の 目 標	<p>教職課程で学ぶ諸科目の入門として、教職に就く心構え学び、さまざまな角度から教育観を鍛えることを目標とする。</p>		
講 義 概 要	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「学級崩壊」「いじめ」「不登校」など、現代教育の抱えている諸問題を取り上げて、まず実態をビデオ等により確認し、参加者で討議する。 2. 諸問題が教育や社会に投げかけている問題を認識し、今後の学習につなげていく道筋を理解していく。 		
使 用 教 材	テキスト	<ul style="list-style-type: none"> ・レポート用：斎藤茂男『生命かがやく日のために』(講談社文庫) ・配布プリント類 	
	参 考 文 献	<ul style="list-style-type: none"> ・無着成恭『山びこ学校』(岩波文庫) ・小西健二郎『学級革命』(国土社) ・黒柳徹子『窓際のトットちゃん』 	
評 価 方 法	<ul style="list-style-type: none"> ・適宜課すレポートによる。 		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	<ul style="list-style-type: none"> ・参加者の討議を取り入れるので、積極的な参加を望む。 ・討議の進展度合い等により、シラバス通りには進まないこともある。 ・E-mail が使用できること。 		

1. 講義の進め方の説明 / 本学で教職免許状を取得できるのはなぜか
2. 「学級崩壊」を考える (1) 学級崩壊の実態
3. " (2) 討議 学級崩壊にどう取り組むか
4. " (3) 学級崩壊を考える
5. 「いじめ」を考える (1) いじめの実態
6. " (2) 討議 いじめをどうしたらなくせるか
7. " (3) いじめをなくすために
8. 「不登校」を考える (1) 不登校とその実態
9. " (2) 討議 不登校は是か非か
10. " (3) 不登校から学ぶもの
11. 障害児教育から考える (1) 同情、お節介について
12. " (2) 「世の光」について

科 目 名	(新)教育原論 (旧)教育原論 (前期)	担当者名	鳥谷部 志乃恵
-------	-------------------------	------	---------

講 義 の 目 標	動物の飼育や植物の栽培とは異なる人間の教育の本質と目的について、教育哲学の視点から考察を加え、理解を深めることを目的とする。		
講 義 概 要	次の事項について講義する。 <ul style="list-style-type: none"> ・教育の概念と基本的構造 ・現代社会における教育目的の構造 ・教育観の基点としての子ども観 ・教育観の展開 		
使 用 教 材	テキスト	『教育と教育観』原聡介他共著 文教書院	
	参 考 文 献	授業の中で必要に応じて指示する。	
評 価 方 法	評価は授業の中で提示する小レポートの提出と定期試験によって総合的に判断する。		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	テキストを読んで予習してくる。教育原論のノートを準備すること。		

1. 教育とは何か
 - (1) 教育の概念
 - (2) 教育の機能
 - (3) 現代社会と教育機能の問題 小レポート(a)提出
2. 教育のめざすもの
 - (1) 教育目的がなぜ問題になるのか
 - (2) 教育目的の設定
 - (3) 民主主義と教育目的 小レポート(b)提出
3. 子どもをどのようにとらえるか
 - (1) 子どもへのまなざし ...生命...
 - (2) 子どもへのまなざし ...価値...
 - (3) 子どもへのまなざし ...関係... 小レポート(c)提出
4. 人は教育に何を期待してきたか
 - (1) 古代、中世の教育観
 - (2) 近代的教育観
 - (3) 今日の教育観 小レポート(d)提出

科 目 名	(新)教育原論 (旧)教育原論 (前期)	担当者名	川 村 肇
-------	-------------------------	------	-------

講 義 の 目 標	教育の本質を理解するために、自らの教育観を相対化しつつ、さまざまな基本的概念や考え方を学ぶ。		
講 義 概 要	<ol style="list-style-type: none"> 1. 子どもの権利条約や教育基本法等を素材にして、人権と子どもの権利、能力の問題、義務教育等の基本的な概念や考え方を学ぶ。 2. 教育と学習との関係を様々な角度から考えていく。 		
使 用 教 材	テキスト	<ul style="list-style-type: none"> ・『ポケット版 子どもの権利ノート』(講義中に注文のこと、100円) ・配布プリント類 	
	参 考 文 献	<ul style="list-style-type: none"> ・堀尾輝久『教育入門』(岩波新書) ・堀尾輝久『教育基本法はどこへ』(有斐閣新書) ・『子どもの権利条約 実践ハンドブック』(旬報社) ・里見実『働くことと学ぶこと』(太郎次郎社) ・佐藤学他『学びへの誘い』(岩波書店) 	
評 価 方 法	講義中の試験と、期末試験とを併せて評価する。		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	<ul style="list-style-type: none"> ・ 討議を多く取り入れるつもりなので、積極的に参加されたい。 ・ E-mail が使えること。 		

1. 講義の進め方の説明
2. 子どもの権利を考える (1) 私たちの「子どもの権利宣言」の作成
3. " (2) 子どもの人権と子どもの権利
4. " (3) 「能力に応じ」た教育とは何か
5. " (4) 義務教育と学習権、参加権
6. 試験
7. 復習
8. 学ぶとはどういうことか (1) わかるということ
9. " (2) 学びと労働
10. " (3) 教えることと学ぶこと
11. " (4) わかるための授業
12. " (5) 学びのある授業

科 目 名	(旧)教育原論 (後期)	担当者名	川 村 肇
-------	--------------	------	-------

講 義 の 目 標	日本の教育の歴史を学び、基礎的な知識を獲得することによって、教育の本質に迫るとともに、現代社会の教育を見る眼を養うことを目的とする。		
講 義 概 要	江戸時代以降現代までの日本の教育の歴史を講義する。参加者は分担して、該当するテキストの部分を発表する。		
使 用 教 材	テキスト	・石島他『日本民衆教育史』(梓出版)	
	参考文献	<ul style="list-style-type: none"> ・大田堯『戦後日本教育史』(岩波書店・品切れ中) ・寺崎他『近代日本教育の記録』(全三巻、日本放送協会出版、品切れ中) ・堀尾輝久『現代社会と教育』(岩波新書) ・山住正己『日本教育小史』(岩波新書) 	
評 価 方 法	参加者による発表および、期末レポートによる(期末レポートは、講義中に興味を持った教育史に関わる事項等を素材とする)。		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど			

年
間
授
業
計
画

1. 講義の進め方の説明 / 参考文献の紹介
2. 江戸時代の教育 (1) 二つの知
3. " (2) 諸教育機関について
4. 「学制」と近代学校について
5. 日の丸と君が代 / 儀式と教育
6. 教育勅語について
7. 大正自由主義教育について
8. 生活綴方教育について
9. 天皇制ファシズム下の教育
10. 敗戦から「逆コース」へ
11. 政治支配から経済支配へ
12. 今日の教育

科 目 名	(新)教職心理学 (旧)教職心理学 (前期)	担当者名	鈴木乙史
-------	---------------------------	------	------

講 義 の 目 標	教師の仕事は、主として教科教育と生徒指導から成り立っている。教職に就く者として、児童・生徒の心のあり方を理解することは欠かすことができないことである。本講義では、人間の心の発達のプロセス、学習のメカニズムを理解することを目標にしている。		
講 義 概 要	乳幼児期から講義をはじめが、主として青年期を中心として講義を行う。		
使 用 教 材	テキスト	特になし。	
	参考文献	講義の中で適宜指示する。	
評 価 方 法	前期末に筆記式のテストを行う。		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	特になし。		

1. オリエンテーション
2. 発達 生得的要因
3. 発達 愛着と母親刺激の剥奪
4. 発達 自律性
5. 発達 自己意識
6. 発達 自我同一性
7. 学習 無学習性行動と学習性行動
8. 学習 学習のメカニズム
9. 学習 モデリング
10. 教授 学習過程
11. 新しい知能観
12. まとめ

科 目 名	(新)教職心理学 (後期) (旧)教職心理学	担当者名	林 潔
-------	---------------------------	------	-----

講 義 の 目 標	<p>授業活動および生徒指導、進路指導についての心理学の役割について紹介します。 学問の傾向も時代と共に変わっていきます。途中で最近の日本教育心理学会の動向について紹介し、この領域についての学生諸君の意見をうかがい、これからの教育活動の課題について考えていきたいと思います。</p>		
講 義 概 要	<p>教育現象に対してどのような方法論を適用するか、このことを前提として基本的な点を取りあげていきます。 全体の進行は対象理解、授業活動への活用、個人指導そして評価という流れです。</p>		
使 用 教 材	テキスト	なし。	
	参 考 文 献	随時紹介。	
評 価 方 法	<p>期末試験を主とします。レポート、平常点を考慮する場合があります。また教職科目なので授業出席も単位取得の条件です。レポート、質問は下記の E-mail を利用されてもよいです。</p>		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	<p>積極的に質問して下さい。あとから思いついたら E-mail (hayashi@shiraume.ac.jp) を使ってください。(1000 字を越えたら分けて送信して下さい)</p>		

1. はじめに
問題提起をかねた全体の展望です。
2. 発達段階としての青年期 (1)
中高生の心理とその特徴について。
3. 同 (2)
4. 学習と教授
5. 学級集団のダイナミックス
学級集団についての集団力学からのアプローチ。
6. 教師のリーダーシップ
PM 理論を中心に教師のリーダーシップについて考えます。
7. 最近の教育心理学の動向
最近の動向についての学会報告を紹介します。
8. 学校ストレス
学校状況をめぐるストレスとその対応について。
9. 教育相談
教育相談の事例について。
10. 進路相談
生徒の進路をめぐる相談活動について。
11. 教育統計の基礎
基本的な方法について紹介します。
12. 教育評価の役割
教育評価の方法とその意味について。

科 目 名	(新)教職心理学 (旧)教職心理学 (前期)	担当者名	森 川 正 大
-------	---------------------------	------	---------

講 義 の 目 標	<p>教育は、人間の「発達」及び「学習」の過程にかかわるはたらきである。この科目は、教育の心理学的基礎として、生涯発達の観点から幼児、児童及び生徒の心身の発達の過程及び学習の過程について学ぶことを目標とする。</p> <p>「発達」及び「学習」についての理論学習とともに、青年期の生徒にかかわる教師のあり方についても考察したい。</p>		
講 義 概 要	<p>人間の「発達」及び「学習」の過程の諸問題を中心として、以下の課題を扱う。</p> <p>教育心理学の課題 発達過程の諸原理 学習過程の諸原理 生徒の個人差とアイデンティティの形成 教師の役割</p>		
使 用 教 材	テキスト	テキストは用いない。プリントによる。	
	参考文献	そのつど指示する。	
評 価 方 法	<p>以下を総合して評価する。</p> <p>出欠。 授業中に課す提出物。 期末試験。</p>		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	<p>第1回目の授業の際「履修者に関するアンケート」を、最終回には「授業評価アンケート」をとります。</p>		

年
間
授
業
計
画

1. 教育心理学の課題
2. 人間の成長と発達の原因
3. 発達段階と発達課題
4. 児童期までの発達
5. 青年期の発達
6. 社会性・道徳性の発達
7. 学習の原理
8. 内発的動機づけと学習意欲
9. 個人差と教育
10. アイデンティティの形成
11. 教育測定と評価
12. 教師の自己点検/まとめ

科 目 名	(新)教職心理学 (旧)教職心理学 (前期)	担当者名	横 田 雅 弘
-------	---------------------------	------	---------

講 義 の 目 標	<p>教職心理学 では、実際に教職についたときに役立つ心理学の実践的知識ならびに教職試験に必要な知識の概略を身につけることを目的とする。ただし、学生には、単に知識を暗記するのではなく、それらの知識を通して教職という仕事についての自分なりの考え方を確立してほしい。</p>		
講 義 概 要	<p>教職心理学 は講義中心の授業であるが、教職についたときに必要となる心理学の知識をこのような短期間に網羅することは不可能である。そこで、ここでは主に人間関係にポイントを絞り、子供の社会性の発達や青年の心理、あるいは学校不適應の問題などを扱う。できるだけ身近な例をもとに、教職の立場からだけでなく、将来受講者が親になったときの立場からも役立つ知識を提供する。</p>		
使 用 教 材	テキスト	<p>テキストは用いないが、必要に応じてプリントを配布する。</p>	
	参 考 文 献	<p>教職試験の準備のためには、この授業でカバーしきれないところを整理しておく必要がある。授業の中で参考文献のリストを配布する。</p>	
評 価 方 法	<p>評価は最終の試験をもとに行う。試験は持ち込み不可の記述式で、熱心に授業に出席していなければよい評価は困難な問題である。</p>		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	<p>将来教師になると決めている人も決めていない人もいると思うが、いずれにしても人間教育を重要視する熱心な学生の受講を期待する。全回出席を原則とする。</p>		

1. オリエンテーション
2. 発達と教育：発達観と教育、認知的発達、道徳性の発達、知能の発達と創造性
3. 人間関係と社会性の発達(1)：親の養育態度と子供のパーソナリティ
4. 人間関係と社会性の発達(2)：学級集団のダイナミクス（友人関係、教師生徒関係など）
5. 学習指導と教育評価(1)：学習理論、動機づけ、教育評価など
6. 学習指導と教育評価(2)：上記テーマの続き
7. 青年期の身体成熟と心理特性(1)
8. 青年期の身体成熟と心理特性(2)
9. 学校不適應と精神衛生(1)：登校拒否、暴力、いじめなど
10. 学校不適應と精神衛生(2)：カウンセリングの基礎知識
11. 学校不適應と精神衛生(3)：上記テーマの続き
12. 前期末テスト

科 目 名	(旧)教職心理学 (後期)	担当者名	鈴木 乙 史
-------	---------------	------	--------

講 義 の 目 標	目の前にいる一人の子ども(人間)を、どのように理解することが可能か。また、有効な援助とは何か、そしてどのように援助すれば良いのか。生徒指導やカウンセリング(心理相談)の方法を講義する。		
講 義 概 要	他者を理解するためには、自己を理解することも必要である。自己理解と他者理解について多くの実習を含めながら、講義をすすめていく。		
使 用 教 材	テキスト	特になし	
	参 考 文 献	講義の中で適宜指示する	
評 価 方 法	出席、課題の達成度、レポートの評価で行う。		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	多くの課題を出すため、きちんと出席できる学生のみ受講して欲しい。		

1. オリエンテーション
2. 児童期・青年期の精神障害
3. 精神病圏の精神障害
4. 神経症圏の精神障害
5. 学校と不適応(いじめ、不登校など)
6. 自己理解と他者理解
7. 自己理解と他者理解
8. 会話について
9. 日常の会話の特徴
10. カウンセリングでの会話
11. カウンセリングの応用
12. まとめ

科 目 名	(旧)教職心理学 (後期)	担当者名	横 田 雅 弘
-------	---------------	------	---------

講 義 の 目 標	<p>教職心理学 では、自分を知るということを目的とする。特に初等・中等教育の教師は子供たちと全人格的に交わるのであり、そのときに自分が教師として、あるいは人間としてどのような特性をもっているのか、どのような教師になりたいと思っているのか、そのために自分のどこを活かし、どこをよりのばしていかなければならないかを知っていることは重要である。授業はこの自分理解の手助けを行う。</p>		
講 義 概 要	<p>教職心理学 では、講義は最小限にとどめ、学生が自己分析にチャレンジする。授業は、心理テストとそれを理解するための交流分析の理論講義、ゲーム、ディスカッション等を中心に展開する。第2回授業で心理テストを行うので、受講希望者は必ず出席すること。</p>		
使 用 教 材	テキスト	<p>テキストは用いない。ただし、心理テストの実費として700円が必要</p>	
	参考文献	<p>交流分析についての参考文献を授業中に示す。</p>	
評 価 方 法	<p>評価は出席と最終のレポートをもとに行う。毎回出席をとる。</p>		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	<p>自己分析という大きな課題にチャレンジする積極性が求められる。全回出席を原則とする。</p>		

1. オリエンテーションと自己紹介のセッション
2. 心理テストの記入
3. 自分の心理テストの結果（グラフ1）を理解するための交流分析の講義
4. 自分の心理テストの結果（グラフ2、3）を理解するための交流分析の講義
5. 自分の心理テストの結果の分析
6. 異文化シミュレーション・ゲーム（バーンガ）
7. グループ討議(1)
8. グループ討議(2)
9. グループ討議(3)
10. グループ討議(4)
11. 教師としての自分の強みと弱みの自己分析
12. まとめとレポートの提出

科 目 名	(新)教育制度 (旧)教育法規	(前期・後期)半期完結	担当者名	池 田 賢 一
-------	--------------------	-------------	------	---------

講 義 の 目 標	最近の教育制度にまつわる諸問題・諸改革を手がかりに、教育制度の基本原理を検討していく。そして、今後の教育制度上の問題解決の方向性を考え、受講生各人の具体的な改革案を作成していく。			
講 義 概 要	公立中高一貫教育や学校選択制など、現在の改革について、その意義、問題点等を検討し、「システムを変更する」ということの各方面への影響を確認する。そこから、教育制度の基本原則を明らかにし、それを歴史的変遷の中に位置づけて検討していく。(ヨーロッパにおける歴史や戦後日本の改革等)そして、各国の代表的な制度改革を紹介し、それらを参考にしつつ、受講生自身の教育制度改革を作成していく。			
使 用 教 材	テキスト	とくに指定しない。		
	参考文献	教育制度研究会編『要説 教育制度』学術図書出版社 佐藤三郎・桑原敏明編『学校教育の基盤』協同出版		
評 価 方 法	授業中に書いてもらうミニ・レポート(4回程度実施予定)及びミニ・テスト(2~3回の授業に1回のペースで実施予定)の提出状況・内容と試験、(各人の教育制度改革案について書いてもらいます)の答案内容とを総合して行う。			
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	各人が自分なりの「教育観」をもち、「改革案」を作成していくわけなので、日頃から TV、新聞等から情報を得ておくこと。			

1. 公立中高一貫教育及び学校選択制の実施の意義と問題点
2. 教育への市場原理の導入をめぐる議論（教育における競争・平等とは何か）
3. 教育制度の基本原則（教育制度の定義、義務教育の歴史、学校体系）
4. 教育制度の基本原則（義務・無償・中立の意義と法制、学習権）
5. 明治期の教育改革（学制から教育勅語へ）
6. 第二次大戦後の教育改革（アメリカ教育使節団報告書、学習指導要領の変遷）
7. 中央教育審議会答申にみる改革の方向性（国際化、情報化、生涯学習等）
8. 「共通教養」という考え方
9. 諸外国の教育改革の方向性
10. 教育制度改革案作成にむけての論点整理
11. 教育制度改革案の発表
12. 総まとめ

科 目 名	(新)教育制度 (旧)教育法規 (前期・後期) 半期完結	担当者名	渋谷 英 章
-------	---------------------------------	------	--------

講 義 の 目 標	<p>「教育制度」という言葉は、「教育制度が悪い」、「教育制度が問題だ」などと、日常的に用いられているが、ともすればその定義や原理を理解することなしに口にされることが多い。しかしながら、現代の教育事象や教育改革を客観的に分析し、論理的な知見を得るためには、教育制度の諸原理を理解していなければならない。したがって、この授業では、教育制度学ならび比較教育学という視点から、現代の教育制度をめぐる諸問題を検討することにより、それらの諸問題を理論的に分析し、教育改革・教育政策の進むべき方向を検証する。</p>		
講 義 概 要	<p>はじめに、教育制度の歴史的発展、教育制度の基本原則など、教育制度学の基本的理論を理解する。</p> <p>次に、世界各国の教育制度・学校制度を比較分析することによって、教育制度の諸原理の実際を検証する。(なお、対象国は年間授業計画で示した国とは異なることもある)</p> <p>その上で、現在のわが国における教育制度改革の分析を行う。</p>		
使 用 教 材	テキスト	二宮 皓 編著『世界の学校 比較教育文化論の視点にたって』福村出版	
	参 考 文 献	<p>*教育制度研究会編『要説 教育制度』学術図書出版社</p> <p>*なお、わが国の教育改革に関しては、受講生各自が、文部省のサイトから答申等をダウンロードすることを予定している</p>	
評 価 方 法	<p>成績評価は、試験の成績をもとに、数回確認する出席状況を加味して行う。日本や諸外国の教育制度・教育改革についての知識を問うのではなく、それらの知識をもとに教育制度をめぐる事象をいかに分析できているかという点を評価する。なお、試験には教科書、ノートを持参し、それらを参照しながら回答することになる。</p>		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	<p>ただ板書を写すだけでは不十分であり、講義内容を理解したうえでその内容について自分自身で考えることが重要である。そのため、板書は必要最小限に留める。またビデオを使用するため、出席が必要条件である。</p>		

1. 教育制度の歴史
2. 教育制度の基本原理
3. 学校体系論
4. ヨーロッパ諸国の教育制度（イギリス、フランス、ドイツ）
5. アメリカ諸国の教育制度 (1) （アメリカ合衆国）
6. アメリカ諸国の教育制度 (2) （エクアドル、ブラジル）
7. アジア諸国の教育制度 (1) （中国、韓国）
8. アジア諸国の教育制度 (2) （シンガポール、インドネシア）
9. アジア諸国の教育制度 (3) （タイ、インド）
10. 日本の教育制度と教育改革 (1) 学校制度
11. 日本の教育制度と教育改革 (2) 高等教育制度
12. 試験

科 目 名	(旧)生涯教育論(後期) (司)生涯学習概論(後期)	担当者名	渋谷 英 章
-------	-------------------------------	------	--------

講 義 の 目 標	<p>「生涯学習社会」は、現在ではあたりまえの言葉になっているが、とすれば「学校を終えた人々に十分な学習機会が提供されれば生涯学習社会は完成する」という表面的で一面的な理解にとどまることが多い。この授業では、学校教育と社会教育をともに変革して両者の統合を図ることこそが、生涯学習社会の基本的な課題であるという視点から、生涯学習社会における学校教育と社会教育のあり方について追求する。</p>		
講 義 概 要	<p>まず、現在「生涯学習社会」が求められる背景と生涯教育の理念を検討する。そのうえで、生涯学習社会における学校のあり方を現在の日本の教育改革の動向に基づいて考察し、次に生涯各期の学習課題を明確にする。さらに、諸外国の事例との比較を通して、日本の生涯学習の現状と課題を分析する。</p>		
使 用 教 材	テキスト	<p>使用する場合には授業中に指示する。</p>	
	参 考 文 献	<ul style="list-style-type: none"> ・真野宮雄編『生涯学習体系論』東京書籍 ・日本生涯教育学会編『生涯学習事典』東京書籍 ・倉内史郎・碓井正久編著『新社会教育』学文社 	
評 価 方 法	<p>評価は、試験等の成績をもとに出席状況を加味して行う。「何を学んだか」という知識の量よりも、「いかに学ぶか」という学び方が問われるべきである生涯教育の原則から、試験にはこの原則にふさわしい問題を課し、ノートや各種の文献などの持参を認める。</p> <p>なお、大学教育を除く生涯学習プログラムに実際に参加し、その体験レポートを提出することを義務づけ、最終試験受験の条件とする。</p>		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	<p>授業への出席が必要条件であるが、出席してもただ単に板書を写すだけでは不十分である。講義内容を十分に理解し、さらにその内容について自分自身で考えることが重要である。</p>		

年
間
授
業
計
画

1. 生涯学習社会とは
2. 「生涯教育論」
3. 「脱学校論」の学校批判
4. 社会教育の定義と特質
5. 社会教育の実際
6. ペタコジーとアンドラゴジー
7. 生涯学習関連施策の展開
8. 学社連携と学社融合
9. 大学改革と生涯学習
10. 高齢化社会、男女共同参画社会と生涯学習
11. ノンフォーマル教育
12. 試験

科 目 名	(新)教育課程論(前期)	担当者名	鳥谷部 志乃恵
-------	--------------	------	---------

講 義 の 目 標	学校において展開される教育課程についての理解を深めるとともに、教育課程と教育方法との関係を踏まえながら、学習者に対応して柔軟に教育課程編成や運営できるような基礎力を養うことを目的とする。		
講 義 概 要	次の事項について取り扱い ・教育課程の基礎 ・教育課程の選択と配列 ・教育課程の類型 ・教育課程の展開 ・わが国の教育課程の編成とその基準 ・教育課程政策(学習指導要領改訂の流れ)		
使 用 教 材	テ キ ス ト	『新制教育原理』名倉英三郎編、八千代出版	
	参 考 文 献	「教育課程編成の視点」小野慶太郎著 東洋館出版社 「教育課程論」伊藤信隆著 建帛社 新版「教材と教具の理論」中内敏夫著 あゆみ出版 中学校学習指導要領、高等学校学習指導要領	
評 価 方 法	定期試験の結果から判断する		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	参考文献には目を通しておくこと。		

1. 教育課程の意義
2. 教育課程と教育方法の関係
3. 顕在的カリキュラムと潜在的カリキュラム
4. 教育課程の選択と配列
5. 形式陶冶と実質陶冶
6. 陶冶材としての文化と経験
7. 教育課程の類型
8. わが国の教育課程
9. 教育課程改革の変遷 (1)
10. " " (2)
11. 教育課程の運営と課題 (1)
12. " (2)

科 目 名	(新)教育課程論(前期・後期)半期完結	担当者名	安 井 一 郎
-------	---------------------	------	---------

講 義 の 目 標	本講は、学校教育、とりわけ教育内容をめぐる問題状況をふまえながら、教育課程の研究、実践に関する今日的課題について考察することを目的とする。		
講 義 概 要	学校において展開されている毎日の授業や諸活動は、一定の教育目的を達成するために編成される教育内容に関する計画である教育課程に基づいて行なわれている。いわば、教育課程は、学校教育における中核としての役割を果たしている。本講では、以上のような観点から、教育課程の編成と評価という問題を中心に、わが国の戦後教育の歩みと教育課程の変遷、新教育課程の分析と課題の検討、今日の学力問題、諸外国における教育課程改革の動向等の問題を取り上げ、各種資料、VTR 教材などを用いながら、多面的に検討を加え、教育課程研究に関する理解を深めていく。		
使 用 教 材	テキスト	未定	
	参 考 文 献	講義の中で紹介する。	
評 価 方 法	出席、レポート、試験による総合評価		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	レポートや感想文を数回提出してもらう予定である。講義の中で紹介する文献には、できるだけ目を通すことを望む。		

1. 教育課程とは何か
2. 教育課程の構造と類型
3. 教育課程編成の理論と方法
4. 学習指導要領と教育課程(1)
5. " (2)
6. 新教育課程の検討
7. 総合学習の可能性
8. 生活教育の系譜
9. 教育課程の評価
10. 教育課程と学力問題
11. 諸外国における教育課程改革の動向
12. 教育課程研究の今日的課題

科 目 名	(新) 教育方法学 (前期・後期) 半期完結 (旧)	担当者名	町 田 喜 義
-------	-------------------------------	------	---------

講 義 の 目 標	「コミュニケーション」をキーワードとして「教育の方法と技術」および「教師の役割」を再検討する。		
講 義 概 要	<p>「学んだことの証しは、ただ一つで何かが変わることである。」この言葉は、林竹二によって導き出された命題である。林はまた、「一人一人の教師が最終的な、最高の責任を負ってなされる仕事であるというところに教師に課せられた仕事の本質的なしんどさがある。・・・教師の自主性、自発性が教育の生命です。これだけ自由な、自分の責任において遂行できる仕事というものを、卒業してすぐ初めから与えられる職場はどこにもありません。その意味で自分を賭けるに値する、それだけ恐ろしい仕事です。・・・教師自身が{学ぶということ}を抜きにして、{教えるということ}は成立しない」と考えた。</p> <p>このようなことを命題として、担当者の講義、受講生の討論・発表などを試みる。 受講生によってグループ討議や発表方式を使用する。</p>		
使 用 教 材	テキスト	使用しない。	
	参考文献	開講時に別紙配布する。	
評 価 方 法	<p>課題レポート：40% (提出遅れ、指定用紙以外は受理しない)</p> <p>定期試験：45%</p> <p>出席回数：15% (欠席1回につき2点減 - やむを得ず欠席をした場合は証明書を提出する事、遅刻は1点減)</p> <p>OHPの教材作成講習会参加：10% (ボーナス点)</p>		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	意見交換の場では積極的に発言すること		

1. 「コミュニケーション」の概念を理解する。
2. 「コミュニケーション」と「教育・学習」の関係を理解する。
3. 「メディア」の概念を理解し、「学習情報」との相互作用を理解する。
4. 教育メディアの機能、種類、利用等を理解する。
5. 教育をコミュニケーション分析する。
6. 教師論を討論する。
7. 教材研究とは何か。
8. 授業を設計する。
9. 言語と非言語の機能の相違を知る。
10. 「評価」と「測定」の概念と関係を理解する。
11. 学習における報酬、コミュニケーションのフィード・バックを考える。
12. 各自の教育方法のイメージを描く。

講義内容と開講日については別紙配布するが、内容は昨年度の授業評価を勘案し変更する場合があります。

科 目 名	(新) 教育方法学 (前期・後期) 半期完結 (旧)	担当者名	安 井 一 郎
-------	-------------------------------	------	---------

講 義 の 目 標	本講は、今日の学校教育、とりわけ授業をめぐる問題状況をふまえながら、教育方法の研究、実践に関する今日的な課題について考察することを目的とする。		
講 義 概 要	毎日の授業をどのように工夫したらよいのか、子どもたちの個性を最大限に生かせるような指導とは何か等の問いに代表されるように、授業の内容とその方法に関する諸問題は、学校教育における最も重要な課題の一つである。本講では教育方法学のうち、特に授業研究の問題に焦点をあて、授業研究を行ううえでの基本的な考え方はどのようなものであるのか、授業を成り立たせている構成要素は何か、授業を展開する具体的な方法とは何か等の問題について、テキスト、配布資料、VTR による実際の授業記録などを用いながら多面的に検討を加え、授業研究に関する理解を深めていく。		
使 用 教 材	テ キ ス ト	宮原修 『教育方法』(国土社)	
	参 考 文 献	講義の中で紹介する。	
評 価 方 法	出席、レポート、試験による総合評価		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	レポートや感想文を数回提出してもらう予定である。テキスト以外にも関連する文献等を紹介するので、それらにはできるだけ目を通すことを望む。		

年
間
授
業
計
画

1. 自分の授業体験をふり返る
2. 授業とは何か
3. 教材研究とは何か
4. 教材研究の事例の検討(1)
5. " (2)
6. 授業を構成する要素
7. 授業を創る技術(1)
8. " (2)
9. 授業における教師 - 生徒関係
10. 特徴ある授業実践例の検討(1)
11. " (2)
12. 授業の評価
13. 授業研究の今日的課題

科 目 名	(旧)ドイツ語科教育法 (前期)	担当者名	本 多 喜三郎
-------	------------------	------	---------

講 義 の 目 標	ドイツ語の教授法を歴史的に概観し、ドイツ語教員としての基礎的知識を養う。		
講 義 概 要	受講者によるテキストの要約発表と討論を中心に進める。		
使 用 教 材	テキスト	G. Neuner / H. Hunfeld : "Methoden des fremdsprachlichen Deutschunterrichts"	
	参 考 文 献	その都度指示する。	
評 価 方 法	要約発表、出席状況および期末試験による。		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	欠席をしないこと、なるべく も受講すること。		

- 1 . オリエンテーション
- 2 . Einleitung
- 3 . Die Grammatik-Übersetzungs-Methode (1)
- 4 . " (2)
- 5 . Die direkte Methode (1)
- 6 . " (2)
- 7 . Die audiolinguale Methode
- 8 . Die audiovisuelle Methode
- 9 . Die vermittelnde Methode
- 10 . Die Entwicklung der kommunikativen Didaktik
- 11 . Der interkulturelle Ansatz
- 12 . まとめ

科 目 名	(旧)ドイツ語科教育法 (後期)	担当者名	本 多 喜三郎
-------	------------------	------	---------

講 義 の 目 標	模擬授業による教壇体験をつむ。		
講 義 概 要	模擬授業		
使 用 教 材	テキスト		
	参 考 文 献		
評 価 方 法	小テスト及び教壇実習による。		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	教材研究及び教案作成をしっかりやること、欠席をしないこと。		

年
間
授
業
計
画

1. オリエンテーション
2. 模擬授業による教授法の研究
3. "
4. "
5. "
6. "
7. "
8. "
9. "
10. "
11. "
12. ドイツ語教授法のまとめ

科 目 名	(旧)英語科教育法 (前期)	担当者名	秋 山 武 夫
-------	----------------	------	---------

講 義 の 目 標	英語を教えるとはどういうことなのか、英語教師はどうあるべきか、理想の英語教育はどうあるべきかなどを、出来るだけ現場をふまえて考えていきます。		
講 義 概 要	理論を主として授業のありかたを概説し、評価の方法、教案の作り方等を講義します。 、 の両方を受講することが望ましい講義です。		
使 用 教 材	テキスト	「英語教育学概論」(金星堂)	
	参 考 文 献	その都度指定する。	
評 価 方 法	この講座は「職業に関する科目」ですので、出席を重視します。2回欠席したら、評価Aは出しません、遅刻2回は欠席1回とみなします。		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	現代の日本の英語教育界には、若い有能な教師が必要です。鋭意、実力を養い、実際に教員になって、新風を吹きこむ気概を持って受講してほしい。		

年
間
授
業
計
画

1. 序論。英語教育のあるべき理想について語ります。
2. 過去の日本において行なわれていたさまざまな教育法、歴史を述べます。
3. パーマーの教育法について。
4. パーマーの教育法について。
5. フリースの教育法について。
6. フリースの教育法について。
7. フリースの教育法について。
8. 外人教師とのティーム授業について。
9. 測定と評価。
10. 教案の作り方（中学）
11. 教案の作り方（高校）
12. Video による授業の研究。

科 目 名	(旧)英語科教育法 (後期)	担当者名	秋 山 武 夫
-------	----------------	------	---------

講 義 の 目 標	英語を教えるとはどういうことなのか、英語教師はどうあるべきか、理想の英語教育はどうあるべきかなどを、出来るだけ現場をふまえて考えていきます。		
講 義 概 要	を受講した人、またはしている人を対象として、その人たちが実技、つまり実際に授業を行う時間です。教育実習、教員採用試験に役立つ講義にするつもりです。 、 の両方を受講することが望ましい講義です。		
使 用 教 材	テキスト	「英語教育学概論」(金星堂)	
	参 考 文 献	その都度指定する。	
評 価 方 法	この講座は「職業に関する科目」と言えますので、出席を重視します。2回欠席したら、評価Aは出しません、遅刻2回は欠席1回とみなします。		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	現代の日本の英語教育界には、若い有能な教師が必要です。鋭意、実力を養い、実際に教員になって、新風を吹きこむ気概を持って受講してほしい。		

年
間
授
業
計
画

1. 序論。授業の進め方について。
2. Video による授業研究。
3. 中学の授業実習（中 1、中 2、中 3）
4. 同上。
5. 同上。
6. 同上。
7. 同上。
8. 同上。
9. 高校の授業実習（高 1、高 2、高 3）
10. 同上。
11. 同上。
12. 同上。

科 目 名	(旧)英語科教育法 (前期)	担当者名	清 水 由理子
-------	----------------	------	---------

講 義 の 目 標	言語教育についての考え方の変遷を学び、さらにそれを踏まえ、これからの言語教育の在り方を考える。特に日本の英語教育は現在どのような問題を抱えており、それに対してどのような改善策があるかを探る。		
講 義 概 要	講義と合わせてビデオ教材を用い、語学教育に関する基本的な考え方を紹介する。授業計画欄を参照。教材研究レポートについては、詳しくは第一回目の授業において説明する。		
使 用 教 材	テキスト	特に定めない	
	参考文献	塩澤利雄他著(1993)『新英語教育の展開』 英潮社 伊藤健三他著(1995)『英語の新しい学習指導』 リーベル出版 畑中孝實、久松豊(1996)『最新英語科教育法』 成美堂 個々のテーマに関する参考書のリストは、そのつど配布する。	
評 価 方 法	出席状況、レポート(教材研究)および期末試験による。		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	教育実習に行く準備のためには、 と の両方を履修することを強く勧める。		

[前期]:

1. 講義内容、レポート課題（教材研究）について
英語教師に望まれること
2. 日本における英語教育 - 変遷と現状 -
3. 主要な教授法の特徴 （ 1 ） Oral Method , GDM
4. " (2) Oral Approach
5. " (3) Communicative Approach
6. " (4) Others
7. Audio Visual Aids （ 1 ） 種類と使用目的
8. Audio Visual Aids （ 2 ） 実際の使い方
9. Testing and Evaluation （ 1 ） テストの目的とその作成
10. Testing and Evaluation （ 2 ） テスト結果の処理と評価
11. Teaching Plan （ 1 ） 作成上の留意点
12. Teaching Plan （ 2 ） "

【備考】レポートの提出期限は、前期の最後の授業時とする。

科 目 名	(旧)英語科教育法 (後期)	担当者名	清 水 由理子
-------	----------------	------	---------

講 義 の 目 標	言語教育についての考え方の変遷を学び、さらにそれを踏まえ、これからの言語教育の在り方を考える。特に日本の英語教育は現在どのような問題を抱えており、それに対してどのような改善策があるかを探る。		
講 義 概 要	<p>新学習要領が実施されると、今までの文法中心の構成からコミュニケーション能力の育成へと一層重きが置かれる授業形態が求められるようになる。それに伴い教科書もさることながら教え方も変えていかなければならなくなる。</p> <p>後期は、より具体的・実践的にコミュニケーション能力育成のための教材と指導法について考えてみることにする。講義のほか、受講者による四技能に関する教材研究発表、模擬実習と討論を中心に進める。</p>		
使 用 教 材	テキスト	特に定めない	
	参考文献	<p>塩澤利雄他著(1993)『新英語教育の展開』 英潮社 伊藤健三他著(1995)『英語の新しい学習指導』 リーベル出版 畑中孝實、久松豊(1996)『最新英語科教育法』 成美堂 個々のテーマに関する参考書のリストは、そのつど配布する。</p>	
評 価 方 法	平常点(研究発表) レポート(研究発表のまとめ、指導案作成、学外の公開授業見学)および期末試験による。		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	受講者には実際に教材作成をしたり、積極的に討論に参加してもらうため、それだけの心構えを持って受講してほしい。		

[後期]:

1. 授業の進め方、レポート課題について
「文法」の指導について
2. 「聞くこと」と「話すこと」の指導について
3. 研究発表 (1)「聞くこと」と「話すこと」の指導方法
4. 「読むこと」の指導について
5. 研究発表 (2)「読むこと」を中心とした指導方法
6. 「書くこと」の指導について
7. 研究発表 (3)「書くこと」を中心とした指導方法
8. 研究発表 (4) 模擬実習
9. 研究発表 (5) "
10. 研究発表 (6) "
11. 研究発表 (7) "
12. 研究発表 (8) "

【備考】レポート(指導案作成)の提出日は、第一回目は、11月の大学祭あけの最初の授業日、
最終レポートは、2001年1月最後の授業時とする。

受講者数によって、予定を一部変更する場合もある。

科 目 名	(旧)英語科教育法 (前期)	担当者名	三 好 健
-------	----------------	------	-------

講 義 の 目 標	一言でいえば、立派な英語教員になってもらうための授業である。立派な英語教員となるための必要最小限度の知識と心構えについて述べたい。とくに英語教育を、単なる技術教育としてでなく、人間教育の観点から考察することを強調し、教育者としての英語教員像を理解してもらうのが、最大の目標である。		
講 義 概 要	英語教育の意義から始めて、英語教育の歴史や各種の教授法を概観し、英語教育の目的を論じ、なお教室における学校文法の扱い方と指導案の書き方にも触れる。 総論的な の延長として に進むので、一方のみの受講では、どうしても不充分と言わざるを得ない。受講者はぜひ と を続けて受けてもらいたい。		
使 用 教 材	テキスト		
	参 考 文 献	「日本の英学 100 年」、「日本の英語教育史」、「英語教育大論争」など。	
評 価 方 法	出席状況とレポートと定期試験による。		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	真剣に英語教員になる意志をもつ諸君に受講してほしい。遅刻・欠席の趣味は認めない。受講希望者は第 1 回目の授業に必ず出席して名前を届けること。		

1. イントロダクション 今後の講義予定を説明し、英語教育の意味を考えてもらう。受講希望者に名前を届けてもらって名簿を作製する。
2. [外国における語学教育の歴史と各種教授法] その1 中世からルネサンス。
3. [同上] その2 ルネサンスから19世紀。
4. [同上] その3 19世紀以降の各種教授法。
5. [日本の英語教育の歴史] その1 幕末時代(蘭学から英学へ)。
6. [同上] その2 明治時代。
7. [同上] その3 大正から昭和へ。
8. [同上] その4 戦後の昭和から現代へ。
9. [英語教育の目的] その1 外国語を学ぶ意義(実用目的と教養目的)。
10. [同上] その2 英語学習の意義(英語の重要性は国際性にあるのか?)。
11. [学校文法の扱い方] 英語教室内での英文法の役割と、その勉強の仕方。
12. [教育指導案の書き方] 指導案の実例を示して、その意義と書き方を説明する。

科 目 名	(旧)英語科教育法 (後期)	担当者名	三 好 健
-------	----------------	------	-------

講 義 の 目 標	<p>英語の教材研究を通じて、教員としての自己の学力を反省してもらい、同時に英語教室の現場で役立つ実的な知識・技術を身につけてもらうことを目標とする。</p> <p>英語科教育法 だけで終らず、必ずこの も履習してほしい。</p>		
講 義 概 要	<p>英語教室での学校文法の扱い方と授業のやり方を説明し、指導案の書き方にも触れた後、高校用英語読本を使って、受講生全員に教材研究を兼ねた授業の実演をやってもらう。一人ひとり指導案の提出が必須となる。なお講義の締めくくりとして、担当者の考える英語教員の理想像を披露する。</p>		
使 用 教 材	テ キ ス ト	高校用英語読本	
	参 考 文 献	「英文法解説」(江川泰一郎著)・「新自修英文典」(山崎貞著)など。	
評 価 方 法	出席状況と授業演習とレポート(指導案)と定期試験により評価する。		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	真剣に教員としての英語力を反省したい諸君に来てもらいたい。遅刻・欠席の好きな学生はおことわり。受講希望者は必ず第1回目の授業に出席して名前を届けること。		

年 間 授 業 計 画	<p>1. イントロダクション 今後の講義の進め方を説明し、学生による授業演習の意義と目標を述べると共に、演習のしかたを具体的に例示する。</p> <p>2. [学生による授業演習とその講評] 学生一人ひとりに演習をやると同時に指導案を提出してもらおう。</p> <p>3. [同上(その2)] 同上。</p> <p>4. [同上(その3)] 同上。</p> <p>5. [同上(その4)] 同上。</p> <p>6. [同上(その5)] 同上。</p> <p>7. [同上(その6)] 同上。</p> <p>8. [同上(その7)] 同上。</p> <p>9. [同上(その8)] 同上。</p> <p>10. [同上(その9)] 同上。</p> <p>11. [演習のまとめ] 授業演習の総評。</p> <p>12. [講義のまとめ] 英語教員の理想像を考察する。</p>
----------------------------	--

科 目 名	(旧)英語科教育法 (前期)	担当者名	J.J. DUGGAN
-------	----------------	------	-------------

講 義 の 目 標	The purpose of this two-term course is to not just introduce the student to the necessary teaching techniques (how to teach), but also to establish a basis of understanding of the approaches, concepts and reasoning on which foreign language education is based, and upon which the student will be able to build and develop a coherent plan of instruction.		
講 義 概 要	We shall spend most of this first term in reading, lecture, and discussion of the approaches, concepts and reasoning on which foreign language education is based.		
使 用 教 材	テキスト	Underwood, M. <i>Effective Class Management</i> . Longman. Handouts.	
	参 考 文 献		
評 価 方 法	Grades will be assessed based on in-class participation (and therefore attendance), a number of assignments, and a final quiz based on the text.		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど			

- 1 . Course description and explanation. Assignment.
- 2 . Theme: *The role of the teacher*. Lecture. Discussion. Longman text pp. 7-18
- 3 . Theme: *The influence of the teaching situation*. Lecture. Discussion. Longman text pp.19-24
- 4 . Theme: *The aspect of the classroom*. Lecture. Discussion. Longman text pp.25-57
- 5 . Theme: *The relationship of teacher, classroom and situation*. Lecture. Discussion. Assignment.
- 6 . Theme: *Considering "Why?"-- Approach*. Lecture. Discussion. Oxford text pp.30-38
- 7 . Theme: *Considering "How?"--Traditional Methods*. Lecture. Discussion. Handouts.
- 8 . Theme: *Considering "How?"--New Methods*. Lecture. Discussion. Handouts. Oxford text pp.241-253
- 9 . Theme: *Considering "What?"--Technique*. Lecture. Discussion.
- 10 . Theme: *Planning a syllabus*. Lecture. Discussion. Handouts. Longman text pp.58-79
- 11 . Theme: *Preparing a syllabus*. Lecture. Discussion. Assignment.
- 12 . First term summary & review. Assessment.

科 目 名	(旧)英語科教育法 (後期)	担当者名	J.J. DUGGAN
-------	----------------	------	-------------

講 義 の 目 標	The purpose of this two-term course is to not just introduce the student to the necessary teaching techniques (how to teach), but also to establish a basis of understanding of the approaches, concepts and reasoning on which foreign language education is based, and upon which the student will be able to build and develop a coherent plan of instruction.		
講 義 概 要	This second term course will be devoted to student in-class practice teaching based on the material covered in the first term, and incorporating practical teaching techniques that will be covered in reading and lecture.		
使 用 教 材	テキスト	Hubbard, P. et.al. <i>A Training Course for TEFL</i> . Oxford University Press. Handouts.	
	参 考 文 献		
評 価 方 法	Grades will be assessed based on in-class participation (and therefore attendance), and either a presentation or a final paper.		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど			

- 1 . Second term course description and set-up. Review of first term material.
- 2 . Theme: *Traditional Teaching Techniques*. Lecture. Discussion. Oxford text pp. 3-30.
- 3 . Theme: *Teaching Reading & Vocabulary*. Lecture. Discussion. Oxford text pp.41-61.
- 4 . Theme: *Teaching Reading & Vocabulary, Part 2*. Presentations. Discussion.
- 5 . Theme: *Teaching Writing & Composition*. Lecture. Discussion. Oxford text pp.61-79.
- 6 . Theme: *Teaching Writing & Composition*. Presentations. Discussion.
- 7 . Theme: *Teaching Listening*. Lecture. Discussion. Oxford text pp.79-95.
- 8 . Theme: *Teaching Listening, Part 2*. Presentations. Discussion.
- 9 . Theme: *Teaching Oral Communication*. Lecture. Discussion. Oxford text pp.198-205.
- 10 . Theme: *Teaching Oral Communication, Part 2*. Presentations. Discussion.
- 11 . Theme: *Teaching Oral Communication & Pronunciation*. Lecture. Discussion. Oxford text pp.207-239.
- 12 . Second term summary & review.

科 目 名	(旧)英語科教育法 (前期)	担当者名	浅 岡 千利世
-------	----------------	------	---------

講 義 の 目 標	言語教育に関する様々な側面を理解した上で、日本の教育現場という視点からこれからの英語教育を考える。		
講 義 概 要	語学教育に関する基本的な考え方やアプローチ、評価方法やレッスンプラン作成法などを紹介する。		
使 用 教 材	テキスト	英語教育概論(金星堂)	
	参 考 文 献	適宜指示する。	
評 価 方 法	出席、授業への貢献、発表、レポート、試験などを総合して評価する。		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	発表や討論への積極的参加を通して自分なりの理想の教師像をみいだしてほしい。		

Tentative Schedule

- 1 . Introduction
- 2-4 . Theoretical Issues
- 5-7 . Teaching English in Japanese Contexts
- 8-11 . Practical Issues
- 12 . Wrap-up

科 目 名	(旧)英語科教育法 (後期)	担当者名	浅 岡 千利世
-------	----------------	------	---------

講 義 の 目 標	言語教育に関する様々な側面を理解した上で、日本の教育現場という視点からこれからの英語教育を考える。		
講 義 概 要	をふまえた上で、言語の4技能に関する実践的な指導方法を行い、実習や討論を中心に進める。 と と両方受講することが望ましい。		
使 用 教 材	テキスト	Teaching by Principles (Prentice Hall Regents)	
	参 考 文 献	適宜指示する。	
評 価 方 法	出席、授業への貢献、発表、レポート、試験などを総合して評価する。		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	発表や討論への積極的参加を通して自分なりの理想の教師像をみいだしてほしい。		

Tentative Schedule

- 1 . Introduction
- 2-4 . Approaches and Methods
- 5-7 . Implementing Classroom Techniques
- 8-11 . Micro-teaching and Feedback
- 12 . Wrap-up

科 目 名	(旧)フランス語科教育法 (前期)	担当者名	一 戸 とおる
-------	-------------------	------	---------

講 義 の 目 標	フランス語とはどういう言語であり、その何をどのように教えるかについての概略を学生諸君と共に考えていきたい。		
講 義 概 要	日本人がフランス語を学習する際にどういう問題があるか、フランス語教育のいくつかの側面(「年間授業計画」参照)に則して考えてみたい。前期は、したがって、理論的な考察が主となる。		
使 用 教 材	テキスト	適宜コピー配布。	
	参考文献	中村啓佑・長谷川富子『フランス語をどのように教えるか』駿河台出版社 Henri Boyer 他 “Nouvelle introduction à la didactique du français langue étrangère”, CLE International	
評 価 方 法	授業への積極的参加、発表、レポート、など。		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど			

- 1 . Qu'est-ce que le langage? Enseigner quoi?
- 2 . français écrit et français oral
- 3 . prononciation et orthographe
- 4 . morphologie
- 5 . vocabulaire
- 6 . syntaxe
- 7 . types de textes(1)
- 8 . types de textes(2)
- 9 . historique des méthodologies
- 10 . évaluation
- 11 . matériel pédagogique(1)
- 12 . matériel pédagogique(2)

科 目 名	(旧)フランス語科教育法 (後期)	担当者名	一 戸 とおる
-------	-------------------	------	---------

講 義 の 目 標	フランス語とはどういう言語であり、その何をどのように教えるかについての概略を学生諸君と共に考えていきたい。		
講 義 概 要	各側面のポイントを1・2 学生諸君に選んでもらって、具体的な教案を作成し、模擬授業をやってもらいたいと思っている。後期は、実践が主となる。		
使 用 教 材	テキスト	適宜コピー配布	
	参 考 文 献	中村啓佑・長谷川富子『フランス語をどのように教えるか』駿河台出版社 Henri Boyer 他 “Nouvelle introduction à la didactique du français langue étrangère”, CLE International	
評 価 方 法	授業への積極的参加、発表、レポート、など。		
受 講 者 対 する 要 望 等			

- 1 . Qu'est-ce que le langage? Enseigner quoi?
- 2 . français écrit et français oral
- 3 . prononciation et orthographe
- 4 . morphologie
- 5 . vocabulaire
- 6 . syntaxe(1)
- 7 . syntaxe(2)
- 8 . types de textes(1)
- 9 . types de textes(2)
- 10 . évaluation
- 11 . matériel pédagogique(1)
- 12 . matériel pédagogique(2)

科 目 名	(新)社会科教育法 (前期)	担当者名	秋 本 弘 章
-------	----------------	------	---------

講 義 の 目 標	中(高等)学校において、社会科(地歴科・公民科)を担当するための基礎となる事柄を修得する。(新)社会科教育法 では、社会科教育(地歴・公民科)の基本的性格を明らかにする。		
講 義 概 要	まず、社会科の成立とその後の変容を追いながら、社会科の特質を明らかにする。そのうえで、今日、社会科教育に課せられている課題を検討する。		
使 用 教 材	テキスト	特に指定はしない	
	参考文献	中学校学習指導要領解説社会編 高等学校学習指導要領解説地理歴史編 公民編 ほか、講義中に提示する。	
評 価 方 法	中等学校教員免許課程であることを鑑み、授業参加度を重視する。そのほか、試験あるいはレポートも評価材料とする。		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど			

1. 社会科教員の1日、学校での位置
2. 社会科成立の背景とその意義
3. 社会科教育の教育課程とその変遷(1) 初期社会科
4. 社会科教育の教育課程とその変遷(2) 系統化
5. 社会科教育の教育課程とその変遷(3) 覚える社会科から考える社会科へ
6. 社会科の学習指導法(1) 問題解決学習と系統学習
7. 社会科の学習指導法(2) 検証学習、探求学習、発見学習、主体的学習
8. 社会科の課題(1) 国際化
9. 社会科の課題(2) 情報化
10. 社会科の課題(3) 環境
11. 社会科の課題(4) 人権
12. まとめ

科 目 名	(旧)社会科教育法 (前期)	担当者名	秋 本 弘 章
-------	----------------	------	---------

講 義 の 目 標	中(高等)学校において、社会科(地歴科・公民科)を担当するための基礎となる事柄を修得する。(旧)社会科教育法 では、社会科教育(地歴・公民科)の授業実践法を身につける。		
講 義 概 要	社会科の各分野(地理、歴史、公民)に関して、身につけるべき学力・態度等を踏まえて、その教授法を学ぶ。また、新しい考え方に対応した教育、情報通信機器活用法、地域との連携についての考察をする。		
使 用 教 材	テキスト	特に指定はしない	
	参考文献	中学校学習指導要領解説社会編 高等学校学習指導要領解説地理歴史編および公民編 中学校・高等学校の教科書ほか講義中に提示する。	
評 価 方 法	中等学校教員免許課程であることを鑑み、授業参加度を重視する。そのほか、試験あるいはレポートも評価材料とする。		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	(旧)社会科教育法、もあわせて履修すること。なお、実践的に学習するため、一部授業で日程等を振り替えて行う場合がある。		

1. 社会科の目標と身につけるべき力
2. 学習の評価
3. 授業形態(1) 教員主導の学習指導法
4. 授業技術(1) 視聴覚教材の作成
5. 授業実践(1) 視聴覚教材の利用(プレゼンテーション)
6. 授業形態(2) 生徒主体の学習指導法
7. 授業技術(2) 情報収集法(図書館との連携・情報通信機器の利用)
8. 授業技術(2) 情報収集法(図書館との連携・情報通信機器の利用)
9. 授業実践(2) ディベート授業の実践
10. 授業形態・技術(3) 臨地学習の計画
11. 授業形態・技術(3) 臨地学習の実践
12. まとめ

科 目 名	(旧)社会科教育法 (後期)	担当者名	秋 本 弘 章
-------	----------------	------	---------

講 義 の 目 標	中(高等)学校において、社会科(地歴科・公民科)を担当するための基礎となる事柄を修得する。(旧)社会科教育法 では、(旧)社会科教育法 をふまえて、社会科教育(地歴・公民科)の年間授業計画および指導案の書き方を身につける。		
講 義 概 要	社会科各分野(地理、歴史、公民)の特色をのべ、年間学習計画を作成する。その後、各分野ごとに指導案を作成、実際に模擬授業を行う。		
使 用 教 材	テキスト	特に指定はしない	
	参考文献	中学校学習指導要領解説社会編 高等学校学習指導要領解説地理歴史編および公民編 中学校・高等学校の教科書ほか講義中に提示する。	
評 価 方 法	中等学校教員免許課程であることを鑑み、授業参加度を重視する。そのほか、レポート等も評価材料とする。		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	(旧)社会科教育法 、 もあわせて履修すること。		

1. 社会科教師の役割と学校カリキュラムのなかの社会科の位置
2. 各分野の特性・内容と年間指導計画
3. 地理的分野の指導法（1）内容構成
4. 地理的分野の指導法（2）指導案作成
5. 地理的分野の指導法（3）模擬授業と討論
6. 歴史的分野の指導法（1）内容構成
7. 歴史的分野の指導法（2）指導案作成
8. 歴史的分野の指導法（3）模擬授業と討論
9. 公民的分野の指導法（1）内容構成
10. 公民的分野の指導法（2）指導案作成
11. 公民的分野の指導法（3）模擬授業と討論
12. 学習の評価

科 目 名	(新)地理・歴史科教育法 (旧)地理・歴史科教育法「歴史」(前期)	担当者名	古 川 堅 治
-------	--------------------------------------	------	---------

講 義 の 目 標	<p>「歴史」を教えるということは、常に教える側の歴史観を問われることでもある。その意味で、「歴史」を教える事の「コトの重大さ」を認識する必要がある。それらを前提に現代の歴史学の成果と歴史教育の関連、歴史教育の沿革と具体的な教授法などを取り上げながら、歴史を教える基本的なスタンスを確立することが本講座のねらいである。</p>		
講 義 概 要	<p>講義ではプリントを配布しながら概説的に説明していくが、積極的な討論が湧き起こることも期待したい。また、ビデオ上映によって、今、話題になっている教科書論争や諸外国との歴史の共通認識の問題についても考えていきたい。授業は、アト・ホームな雰囲気で行うことに心がけたい。なお後半3回は「模擬授業」の回をもうけ、各回とも1~2人ずつ(1人 30~40分)、それぞれ日本史、世界史どちらの分野でも自分の好きなテーマを選んで「授業」を行なってもらう。</p>		
使 用 教 材	テキスト	特に使用することはない。	
	参考文献	最初の授業で「参考文献一覧表」を配布するので、適宜、図書館等で参考にとすること。	
評 価 方 法	<p>基本的にはレポート提出により評価するが、出席や議論への参加度合も考慮する。なお、「模擬授業」を希望する人は、その報告・発表をもってレポートの代わりとする。</p>		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	<p>教員を志望して授業に臨むはずであるから、個々人が主体的・積極的に授業に参加することを期待する。</p>		

年 間 授 業 計 画	<p>1. 「はじめに ～なぜ歴史を学ぶのか？（歴史学と歴史教育）～」 1) 現在・過去・未来 2) 歴史を学ぶ者の責任と課題</p> <p>2. 「歴史教育の方法」 1) ビデオ・映像資料を使った学習 2) 史・資料の操作</p> <p>3. 「歴史教育の方法」 1) 人物の採り上げ方 2) 地域の学習</p> <p>4. 「『世界史A』と『日本史A』の扱い方」 1) A科目とB科目 2) 世界史の場合と日本史の場合</p> <p>5. 「歴史教育におけるヨーロッパ史」 1) ヨーロッパ史教育の今日的意義 2) 「文化圏」学習から「広域的地域世界」学習へ</p> <p>6. 「歴史教育におけるヨーロッパ史」 1) 国際歴史教科書対話 2) ドイツの例（VIDEO）</p> <p>7. 「歴史教育におけるアジア史」 1) 日韓教科書論争（VIDEO） 2) 日本の「アジア認識」</p> <p>8. 「歴史教育におけるアジア史」 1) 世界史における東アジアの課題と方法 2) 歴史認識の「共通化」の問題</p> <p>9. 「まとめ ～歴史のこわさと面白さ～」 1) 歴史のこわさ 2) 歴史の面白さ</p> <p>10. 「模擬授業」</p> <p>11. 「模擬授業」</p> <p>12. 「模擬授業」</p>
----------------------------	--

科 目 名	(旧)地理・歴史科教育法「地理」(後期)	担当者名	秋 本 弘 章
-------	----------------------	------	---------

講 義 の 目 標	高等学校における地理教育の目的、内容、方法、課題等について考察するとともに、授業実践上の基礎的な知識・技能の育成を目指す。		
講 義 概 要	日本の地理教育史、各国の地理教育をふまえ、地理で身につけさせるべき見方・考え方、技能について概説した後、いくつかのトピックを提示しながら、高校における地理教育の実際、展望、課題等を研究する。		
使 用 教 材	テキスト	なし	
	参 考 文 献	中学校学習指導要領解説社会編 高等学校学習指導要領解説地理歴史編 ほか、講義時に提示する。	
評 価 方 法	中等学校教員免許課程であることを鑑み、授業参加度を重視する。そのほか、レポート等も評価材料とする。		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	教育法の講義であるから、高等学校「地理」の教科書を読んで、その内容は理解しておいてほしい。		

1. オリエンテーション 地理教育の目標
2. 日本の地理教育の歩み
3. 諸外国の地理教育
4. 地理的見方・考え方と地理的技能
5. 指導法の工夫
6. 新学習指導要領の特質
7. 地理教育の実際 地図教育について
8. 地理教育の実際 野外観察、野外調査、地域調査の計画と指導
9. 地理教育の実際 系統地理分野の扱い方
10. 地理教育の実際 地誌分野の扱い方
11. 地理教育の課題 現代の諸課題に対する地理的アプローチ法
12. まとめ

科 目 名	(旧)公民科教育法 (前期)	担当者名	小 川 一 郎
-------	----------------	------	---------

講 義 の 目 標	<p>学習指導要領（平成元年）改訂によって、高等学校の社会科は再編成され、地理・歴史と公民科となり、平成 11 年の改訂に引き継がれている。</p> <p>公民科では、国際化、情報化の進展に主体的に対応できる公民としての資質をもつ主体性のある人間の育成を目指す、十分それを達成できる公民科教育法を身につけさせる。</p>		
講 義 概 要	<p>戦前の公民教育が極端な国家主義や軍国主義に基づいたものであったことを認識させ、その反省の上に立って公民教育が発芽したことを理解させる。</p> <p>公民科は、「公民としての資質の育成」を目指しているが、それを達成するための内容、方法について理解させる。模擬授業に 2 時間ほど充てる。</p>		
使 用 教 材	テキスト	小川一郎『在り方生き方指導の理論と実践』清水書院	
	参 考 文 献		
評 価 方 法	<p>単に、知識、理解をする講座ではないので、出席を重視する。</p> <p>期末テストかレポート提出。</p>		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	<p>実践的指導力を身につけ、充実した学習を行えるように、積極的に授業に出席することを希望する。</p>		

年 間 授 業 計 画	<p>1. 年間の公民科教育法の概要について 特に、前期の公民科教育法 の講座の概要について 現代における公民科教育の役割について</p> <p>2. 公民教育刷新委員会の答申や新教育指針から引き出される公民教育の構想について</p> <p>3. 公民科教育の意義や目的を正しく理解するための「公民」の概念や「公民としての資質」について</p> <p>4. 公民科教育の、代表的な指導法や新しい学力観について</p> <p>5. 平成元年の学習指導要領の社会科の再編成による公民科の誕生について。その理由、社会的背景について。また、社会科の倫理や政経の分野の歴史の変遷について。さらに平成11年の改訂の主要事項について。</p> <p>6. 公民科の教育目標、内容と構造について、科目「現代社会」の内容構成について</p> <p>7. 科目「倫理」の目標と内容構成について、「政治、経済」の目標と内容構成について</p> <p>8. 年間授業計画の作成について</p> <p>9. 授業の指導案作成について</p> <p>10. 模擬授業</p> <p>11. 模擬授業</p> <p>12. 公民教育が現代において当面するいくつかの課題について</p>
----------------------------	---

科 目 名	(旧)公民科教育法 (後期)	担当者名	小 川 一 郎
-------	----------------	------	---------

講 義 の 目 標	公民科教育法 では、目標、内容に対応した指導方法を研究し、実際に模擬授業などを行い、実践的指導力を身に付けさせる。また、表現力や判断力を身に付けさせるため、ディベートの授業など新しい指導方法を開発する意欲と実践力を培う。		
講 義 概 要	実際に授業を行う上で必要な指導方法に重点を置いて授業を進め、実際に学生が授業を行って、体験的に身につけるようにする。 実際に、 問題解決学習 グループ学習 ディベート などを学習する		
使 用 教 材	テキスト	小川一郎 『「在り方生き方指導」の理論と実践』清水書院	
	参考文献		
評 価 方 法	出席状況と提出物を重視 レポート提出		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	高校教師を目指す者は必ず受講するように希望する		

年 間 授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 公民科教育法 は、公民科教育法 の実践編であること。後期の講座の概要について 2. 新しい学力観における関心・意欲・態度の育成や、表現力、判断力の伸長と問題解決学習について 3. グループ学習と表現力の育成について 4. 公民科の指導案の作成 5. 作成した指導案について意見交換、講評 6. 模擬授業の実施、自己批判、意見交換、講評 7. 同上 8. 同上 9. 論理的な思考力や表現力を育成する授業方法としてのディベートについて 10. ディベートの実施、ディベート実施の準備 11. ディベートの実施 12. 公民科教育法についてこれまでの講座の総括。 特に公民科教育法の課題について
----------------------------	---

科 目 名	(新) (旧) 道徳教育の研究(前期・後期)半期完結	担当者名	鳥谷部 志乃恵
-------	-------------------------------	------	---------

講 義 の 目 標	人間形成における道徳教育の必然性についての理解を深め、学校教育における道徳の指導の特質を踏まえながら、「道徳の時間」において指導することができるための基礎的な力を養うことを目的とする。
講 義 概 要	次の諸問題について取り扱う。 <ul style="list-style-type: none"> ・道徳とは何か ・道徳をどう教えるか ・こころの発達と道徳教育 ・道徳教育の歴史 ・学校における道徳教育の実践 ・道徳の指導案の構想
使 用 教 材	テキスト 『共にまなぶ道徳教育』改訂版 村井実・遠藤克弥編著 川島書店
	参 考 文 献 『道徳教育』 天野貞祐著(天野貞祐全集 第6巻) 栗田出版会 『道理の感覚』 " 著(天野貞祐全集 第1巻) " 『道徳は教えられるか』村井実著 国土新書 『「道徳」授業 批判』宇佐美寛著 明治図書
評 価 方 法	評価は授業の中で指示する小レポートの提出と定期試験によって総合的に判断する。
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	参考文献には目を通しておくこと。

1. 現代社会と道德教育の課題
2. 道德とは何か
3. 道德は教えられるのか
4. 善さとは何か
5. 道德性の発達について
6. 戦前までの道德教育について
7. 戦後の道德教育について (小レポート提出予定)
8. 学校における道德教育の構造
9. 道德的実践力とは何か
10. 「道德の時間」における道德指導の内容と方法
11. 「道德の時間」の指導案の構想(1)
12. 「道德の時間」の指導案の構想(2) (小レポート提出予定)

科 目 名	(新) (旧) 道徳教育の研究(前期)	担当者名	安 井 一 郎
-------	------------------------	------	---------

講 義 の 目 標	本講は、今日の学校教育をめぐる問題状況をふまえながら、児童・生徒の人間形成において極めて重要な役割を果たす道徳教育の目的、内容、方法及びその今日的課題について考察することを目的とする。		
講 義 概 要	道徳教育は、人間形成の基礎にかかわるものであり、人間が社会の中で人間として生きていくために不可欠の内容を有している。それゆえ、学校教育においては、知識・技術の教育とともに、道徳教育が 2 本の柱として重要な役割を果たしてきた。本講では、道徳教育の意義と目的、学校教育における位置と役割についての基本的な理解を得たうえで、道徳について考えるうえでの基本的な問いを「教育において生命のもつ意味は何か」と捉え、その観点から、今日の道徳教育の現状を分析し、その特徴と問題点を明らかにし、一人ひとりの子ども「生きる力」の育成に資する道徳教育とは何かについて検討を加える。		
使 用 教 材	テキスト	未定	
	参 考 文 献	講義の中で紹介する。	
評 価 方 法	出席、レポート、試験による総合評価		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	レポートや感想文を数回提出してもらう予定である。講義の中で紹介する文献には、できるだけ目を通すことを望む。		

1. 自分の道徳教育体験をふり返る
2. 道徳とは何か
3. 学校教育における道徳教育の位置と役割(1)
4. " (2)
5. 道徳教育の歴史の変遷(1)
6. " (2)
7. 教育における生命の意味
8. 生命に対する畏敬の念(1)
9. " (2)
10. 学習指導案の作成(1)
11. " (2)
12. 道徳教育の今日的課題

科 目 名	(新) (旧)特別活動(前期・後期)半期完結	担当者名	安 井 一 郎
-------	---------------------------	------	---------

講 義 の 目 標	本講は、今日の学校教育をめぐる問題状況をふまえながら、教科、道徳とともに教育課程の一領域を構成する特別活動の目的、内容、方法及びその今日的課題について考察することを目的とする。		
講 義 概 要	特別活動は、その前身である自由研究、特別教育活動を含めて、戦後教育の初期から学校の教育活動の一環として計画され、民主主義に基づく戦後教育における重要な教育内容として実践されてきた。本講では、21世紀を目前に控え、学校教育の大幅な改革の必要性が求められている今日において、子どもたちの主体的、実践的、総合的な活動である特別活動がますます重要な意味をもってくるとの認識に基づいて、それが児童期や青年期の人間形成においてどのような役割をもっているのか、その役割を十分に果たすためには児童・生徒の諸活動をどのように組織し、指導することが望ましいか等の問題について検討を加える。		
使 用 教 材	テキスト	山口満編著『特別活動と人間形成』(学文社)	
	参考文献	講義の中で紹介する。	
評 価 方 法	出席、レポート、試験による総合評価		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	レポートや感想文を数回提出してもらう予定である。テキスト以外にも関連する文献等を紹介するので、それらにはできるだけ目を通すことを望む。		

1. 自分の特別活動体験をふり返る
2. 現代の人間形成と特別活動(1)
3. " (2)
4. 特別活動の歴史の変遷(1)
5. " (2)
6. 教育課程における特別活動の位置と役割(1)
7. " (2)
8. 学級活動・ホームルーム活動
9. 児童会活動・生徒会活動
10. クラブ活動・部活動
11. 学校行事
12. 特別活動の今日的課題

科 目 名	(新) (旧)特別活動(前期)	担当者名	佐藤利明
-------	--------------------	------	------

講 義 の 目 標	<p>学習指導要領についての理解 特別活動の目標及び基本・指導理念を知る 特別活動は生徒の人間形成に重要な内容であること及び学校教育目標達成に具体的に作用することの理解</p>		
講 義 概 要	<p>学習指導要領の必要性と法的根拠 学習指導要領教育課程編成の一般方針1について 特別活動の変遷及び特質と目標 生徒の自発的・自治的活動の重みを知り、育成する具体例 学級経営、学級活動での教師と生徒の信頼関係、生徒相互の好ましい人間関係 生徒会活動、学校行事、体験学習 評価と課題</p>		
使 用 教 材	テキスト	<p>中学校，高等学校 学習指導要領解説 特別活動編 文部省 指導案等プリント配布</p>	
	参 考 文 献		
評 価 方 法	<p>定刻出席とレポート評定 レポート提出 教務課一係 前期 平成12年7月14日(金)まで 後期 平成13年1月18日(木)まで</p>		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	<p>「指導者」を目指す意識を強くもち受講する。止むを得ず欠席の場合は欠席届と作文(課題はその都度指示)をすみやかに提出する。</p>		

1. 期中の講義内容説明
 学習指導要領の必然性と法的根拠 教育課程編成の一般方針 1 (新・旧) と特別活動。
2. 学校教育目標と特別活動 教師の助言指導援助 授業時数 (新・旧)
3. 特別活動の変遷 学校生活の充実・向上 (討議含)
4. 学級活動 指導案
 自主的、自発的、自治的活動の理論と実際
5. 所属感・存在感・成功感・充実感を味わわせる具体的指導 (討論含)
6. 教育相談・進路指導
7. 生徒会活動の実際 体験学習 指導案
8. 学校行事の実際
9. 学級・学年・学校経営と特別活動
10. 今日の問題 (いじめ 登校拒否 基本的生活習慣 等) と対応
11. 家庭・地域と特別活動
12. 特別活動の展望
 レポート課題提示。

科 目 名	(新) 生徒指導法 (前期) (旧) 生徒指導法 (前期)	担当者名	小 川 一 郎
-------	----------------------------------	------	---------

講 義 の 目 標	<p>生徒指導は、生徒のそれぞれの人格のより良き発達を目指すとともに、学校生活が生徒にとって充実したものになるようにすることを目的とする。そのためには、それぞれのもつ個性を伸長し、自己実現を図り、進路を主体的に選択決定できる資質能力を育成するために、教師は生徒一人一人を理解し、指導・支援する必要がある。そのような教師の生徒指導の役割を理解することを目的とする。</p>		
講 義 概 要	<p>生徒指導、進路指導の意義と課題 人間の成長、発達についての理解 問題行動の理解と指導法 ガイダンスの意味と役割 生徒指導、進路指導の組織と運営</p>		
使 用 教 材	テキスト	<p>小川 一郎 編著「現代の生徒指導」文教書院 中野目直明</p>	
	参考文献	<p>生徒指導の手引(改訂版)文部省</p>	
評 価 方 法	<p>出席状況 レポート提出</p>		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど			

1. 生徒指導、進路指導の意義と性格
2. 生徒指導、進路指導の学校における位置付け
3. 生徒指導の課題
人間関係の改善と望ましい人間関係の促進
基本的な生活習慣の改善など
4. 進路指導の当面する課題
偏差値、進路適性と進路
5. 人間としての在り方生き方と生徒指導、進路指導
6. 生徒指導と生徒理解の方法と技術
7. 進路指導と自己理解、個性の発見
8. 問題行動の理解と指導
いじめ
9. 問題行動の理解と指導
不登校、中途進学、その他
10. 教育相談、進路相談、ガイダンス
11. 進路指導の実践的展開
12. 生徒指導、進路指導の組織と運営

科 目 名	(新) (旧) 生徒指導法(前期・後期)半期完結	担当者名	佐藤利明
-------	-----------------------------	------	------

講 義 の 目 標	<p>生徒指導・進路指導は、学校教育において生徒一人ひとりが生きがいをもって充実した学校生活ができるようにすることである。</p> <p>生徒のそれぞれがもつ個性の伸長をはかり、資質・生活態度の育成を目指し、人間形成をはかる重要な機能をもっていることを理解する。</p>		
講 義 概 要	<p>生徒指導の意義、原理及び機能論。</p> <p>進路指導の理念、意義と背景、基本的性格。</p> <p>生徒理解の意義と方法及び留意点。</p> <p>個別指導・集団指導、非行及び問題行動の対応。</p> <p>教育課程と生徒指導・進路指導。</p> <p>教育相談、地域社会との連携。</p> <p>学校教育目標との関連、全教職員の共通理解。</p>		
使 用 教 材	テキスト	生活体験や人間関係を豊かにする生徒指導(文部省) プリント配布	
	参考文献		
評 価 方 法	<p>定刻出席とレポート評定</p> <p>レポート提出 教務課一係あて</p>		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	<p>止むを得ず欠席の場合は、事前に欠席届と論作文(課題はその都度指示)を提出する。事後の場合はすみやかに同様提出する。</p>		

年 間 授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 講義概要説明（生徒指導・進路指導） 生徒指導の意義、原理及び機能論 生徒指導は時代の変遷でどう変わったか 2. 学校教育目標と生徒指導及び指導体制・学級・学年経営 教育課程と生徒指導 3. 生徒指導・進路指導の実際 信頼関係（生徒間・生徒と教師）を得るための努力点 生徒理解の考え方とその実際及び留意点 4. 個別指導（教育相談） 集団指導 5. 非行・問題行動の事例と討議 指導方法 6. いじめ・登校拒否・地域社会との連携の事例討議 7. 生徒指導をめぐる諸問題と対応 8. 進路指導の理念 意義とその背景、基本的性格、青年期の発達課題等 9. 進路指導の充実 第1章第6の2(4)を中心として 進路指導の諸活動 10. 進路指導と教育課程 特に特別活動との関連 11. 進路相談のすすめ方 資料活用を中心とした援助・助言・指導 12. まとめ 生徒指導と進路指導 レポート課題提示
----------------------------	--

科 目 名	(新) 学校カウンセリング (前期)	担当者名	林 潔
-------	--------------------	------	-----

講 義 の 目 標	<p>教育現場にも、いわゆるこころの問題が大きくとりあげられています。知識の伝達であったとしても児童・生徒の情緒の問題をさけるわけにはいきません。</p> <p>人間の問題にどうかかわるのか、そのいくつかの方法について紹介したいと思います。</p>		
講 義 概 要	<p>悩みは悩ますもの(ストレッサー)と悩む人に分けて考えることができます。カウンセリングは悩む人への援助です。しかしこれには治療・予防・開発の3つの側面があります。</p> <p>これを前提として、一般によく活用される来談者中心カウンセリング、認知行動療法の基礎と方法について紹介します。</p>		
使 用 教 材	テキスト	林・瀧本・鈴木「カウンセリングと心理テスト」ブレーン出版 1,900円	
	参 考 文 献	随時提示します。	
評 価 方 法	<p>期末試験を主とします。レポート、平常点を考慮する場合があります。また教職科目なので授業出席も単位取得の条件です。レポート、質問は下記の E-mail を利用されてもよいです。</p>		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	<p>積極的に質問して下さい。あとから思いついたら E-mail (hayashi@shiraume.ac.jp) を使ってください(1000字を超えたら分けて送信して下さい)</p>		

年 間 授 業 計 画	1. カウンセリングの役割		
		基本的には話し合い治療であるカウンセリングの役割—homeostasis の回復。	
	2. さまざまなカウンセリング		
		いろいろな立場の特徴について。	
	3. 受理面接の役割		
		来談者（相談に来た人）の問題を把握する。	
	4. 来談者中心カウンセリングについて（1）		
		Rogers のカウンセリングの原理と実際について紹介します。	
	5. 同		（2）
	6. 同		（3）
	7. 行動療法と認知行動療法（1）		
		行動療法の原理と方法（1）	
8. 同		（2）	
	同	（2）	
9. 同		（3）	
	認知行動療法の原理と方法（1）		
10. 同		（4）	
	同	（2）	
11. 同		（5）	
	同	（3）	
12. カウンセリングと心理テスト			

科 目 名	(新)学校カウンセリング(後期)	担当者名	森 川 正 大
-------	------------------	------	---------

講 義 の 目 標	<p>「不登校」、「無気力」、「いじめ」、「自殺」、「非行」、「暴力」など、学校教育現場における問題の増加は、我が国の社会問題とまでなっている。こうした状況に対応するためスクール・カウンセラー制度が発足したが、まだ緒についたばかりである。</p> <p>学校カウンセリングは、専門カウンセラーのみならず、教科担当の教師にとっても重要な課題であり、生徒指導や学級運営の面でも有効である。この科目は、中・高の教育職員に必要な「学校カウンセリング」の基礎的知識を身につけることを目標とする。</p>		
講 義 概 要	<p>授業回数が限られているので、カウンセリングの理論については、できるだけ時間外の文献学習に委ね、教室においては、学校カウンセリングの実際について事例を交えながら講義するようにしたい。カウンセリングの技法等については、体験学習もとり入れる。</p> <p>内容の概要は、以下のとおり。</p> <p>学校カウンセリングの課題 教師と学校カウンセリング 生徒理解と援助のポイント 生徒の諸問題 カウンセリングの理論と技法 学校カウンセリングと心理テスト 保護者への援助 校内組織その他の活用と連携</p>		
使 用 教 材	テ キ ス ト	テキストは用いない。プリントによる。	
	参 考 文 献	<p>『学校カウンセリング』国分康孝編 日本評論社</p> <p>『学校カウンセリングの考え方・進め方』松原達哉編 教育開発研究所</p> <p>その他、そのつど指示する。</p>	
評 価 方 法	出席を重視する。毎回、「ふりかえり(質問・感想)」用紙の提出を求める。試験を行う。		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	一方的な講義でなく、かかわり合いのある授業としたいので積極的参加を期待する。第1回授業の際「履修者に関するアンケート」を、最終回には「授業評価アンケート」をとる。		

年
間
授
業
計
画

1. 学校カウンセリングの課題
2. 教師と学校カウンセリング
3. 生徒理解と援助のポイント(1)
4. 生徒理解と援助のポイント(2)
5. 生徒の諸問題：事例の紹介
6. カウンセリングの理論と技法(1)
7. カウンセリングの理論と技法(2)
8. カウンセリングの理論と技法(3)
9. カウンセリングの理論と技法(4)
10. 学校カウンセリングと心理テスト
11. 保護者への援助：コンサルテーションとカウンセリング
12. 校内組織その他の活用と連携/まとめ

科 目 名	(旧)教育実習 (後期) (教育実習の事前・事後指導)	担当者名	鳥谷部 志乃恵
-------	--------------------------------	------	---------

講 義 の 目 標	教育実習の意義や目標、内容及び方法について理解を深め、効果的で充実した教育実習が体験できるための事前指導として実際のな学習を目標とする。		
講 義 概 要	<p>次の事項について取り扱う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育実習の意義、目的 ・教育実習の内容と方法 ・学校の組織と運営 ・実習生としての心得とサービスの在り方 ・授業への取り組み 		
使 用 教 材	テキスト	教育実習の指針(本学免許課程編集)	
	参 考 文 献	必要に応じて指示する。	
評 価 方 法	出席とレポート(指導案等)の提出を求め総合的に評価する。		
受 講 者 対 する 要 望 等	教育実習の事前指導であるから原則的に欠席は認められない。止むを得ない事情によって欠席せざるを得ない場合は欠席届とレポート提出を求める。		

年
間
授
業
計
画

1. 教育実習の意義・目的について
2. 教育実習の形態（観察・参加・実習）について
3. 学校の組織と運営について
4. 教育実習生としての心得とサービスの在り方
5. 教育実習を効果的に行なうための工夫や留意事項
6. 教育実習の内容と方法（各教科、特別活動、道徳等）
7. 授業への取り組み（教材研究の方法）
8. 授業への取り組み（指導案の構想、発問や板書等について）
9. 指導案作成作業
10. "
11. 模擬授業
12. "

科 目 名	(旧)教育実習 (後期) (教育実習の事前・事後指導)	担当者名	安 井 一 郎
-------	--------------------------------	------	---------

講 義 の 目 標	本講は、教育実習の意義や目的、その概要を理解するとともに、学習指導案の作成、基礎的な指導技術の習得、模擬授業等を行なうことにより、教育実習に向けての準備を進めることを目的とする。		
講 義 概 要	教育実習は、これまで大学の教職課程で学んできたことの成果を、実習校での学校運営に教育実習生として直接参加することによって、具体的に実証する機会である。本講では、教育実習の事前指導として、教育実習に参加することの意義や目的、実習期間中の学校生活の概要を理解するとともに、学習指導案の作成、基礎的な指導技術の習得、模擬授業等を体験することにより、実習における学習のポイントを明確にする。また、実習生としての心がまえ、実習期間中の留意点等についても触れ、教育実習に関する理解を深めていく。		
使 用 教 材	テキスト	『教育実習の指針』(獨協大学)	
	参考文献	講義の中で紹介する。	
評 価 方 法	出席、レポートによる。		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	教育実習の事前指導であり、原則として欠席は認められない。実際の教育実習を想定し、真剣な態度で受講することを望む。		

年
間
授
業
計
画

1. 教育実習とは何か
2. 教育実習の概要
3. 学校の組織と教師の職務
4. 教材の研究
5. 学習指導案の作成(1)
6. " (2)
7. 発問
8. 板書
9. 生徒とのコミュニケーション
10. 模擬授業(1)
11. " (2)
12. 教育実習期間中の諸注意

科 目 名	(旧)教育実習 (後期) (教育実習の事前・事後指導)	担当者名	小 川 一 郎
-------	--------------------------------	------	---------

講 義 の 目 標	<p>教育実習について、その概要を理解し、目的意識をもつてのぞめるようにする。そのため教育実習の意義や目的について、十分に理解させる。</p> <p>実習校に新風を吹き込み生徒に刺激を与えるために、実習にのぞむ心構え、生徒とのコミュニケーションのとり方などを重視し、授業を進める。さらに実習期間における仕事の内容を理解させ、十分に事前の準備ができるようにする。</p>		
講 義 概 要	<p>教育実習の意義・目的について</p> <p>教師の仕事の性質について(教師と生徒の関係など)</p> <p>教師の資質とその形成について</p> <p>実習にのぞむための目的意識とその心構え</p> <p>学校の仕事の内容について</p> <p>学校の現代的課題について</p> <p>実習生の立場について</p>		
使 用 教 材	テキスト	「教育実習の指針」獨協大学	
	参 考 文 献	小川一郎編著『ホームルーム担任読本』文教書院	
評 価 方 法	評価は期末テストかレポートと授業への参加を考慮して決定する。		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	教育実習の事前指導なので、講座に出席することが大切である。教育実習が間近に迫るといろいろ不安や疑問をもつようになる。十分な準備と心構えをつくる必要がある。適宜、個人指導する。		

1. 教育実習 ・ が制度化された意義や目的について、また、この講座の概要について
2. 教師の仕事の性質、教師の資質について
3. 教育実習の意義・目的について 先輩実習生の感想、意見などについて
4. 教育実習全般の事前の準備や実習校との連絡、実習期間、事後の対応。心得と準備について
5. 教育実習の形態、(1)観察、(2)参加、(3)教壇実習について
6. 教育実習の仕事の内容、学校の教育活動の概要について
7. 研究授業への対応、教材研究について、特に、教材研究には多くの時間を必要とするので、その自覚と心構えについて
8. 学級担任としての学級経営と学級経営上の諸問題について
9. 学級担任としての生徒指導、進路指導について、最近、いじめ、登校拒否（不登校）、高校中途退学など対応のむずかしい問題が増加しているためその対応について
10. 生徒理解の方法と生徒とのコミュニケーションについて
11. 教師として義務づけられている研修と法規について 教師としての服務や勤務など、必要な法規について
12. 教育実習の記録、反省など教育実習日誌の記録や毎日の指導教官との報告、連絡、相談について

科 目 名	(旧)教育実習 (後期) (教育実習の事前・事後指導)	担当者名	佐藤利明
-------	--------------------------------	------	------

講 義 の 目 標	<p>教育行政のしくみ、公立・私立学校。 学習指導要領・教育課程の基本的事項。 先輩の感想と意見。教師の学校での勤務状況を知る。 生徒と教師、生徒と生徒の信頼関係よい人関係をつくる工夫。 一層充実した感動ある教育実習に資する。</p>
講 義 概 要	<p>教育実習の意義。 都道府県・市町村教育委員会と学校(政令都市含む)。教職員の採用。服務監督。私立学校。 教職員としての専門性。先輩の実習後の感想と意見。 学習指導要領のねらい。 よい授業をするための研究。 教師の一日。職員会等各会への参加の心構え。 学校教育の今日的課題とその対応。</p>
使 用 教 材	<p>テキスト 「教育実習の指針」獨協大学教務部学務課免許課程係編集・発行 プリント配布</p>
	<p>参 考 文 献</p>
評 価 方 法	<p>定刻出席とレポートの評定 レポート提出 教務課1係あて。平成13年1月18日(木)まで レポート課題 最終時提示</p>
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	<p>「指導者」を目指す意識を強くもち、充実した教育実習ができるよう意欲をもって受講する。止むを得ず欠席の場合は欠席届と論作文(課題はその都度掲示)をすみやかに提出する。</p>

1. 講義概要説明。学校教育に関する関係法規の概略。
都道府県・市町村教育委員会と公立学校。私立学校。教科書。
2. 教育職員の専門性（教職観、教師像、研究修養、授業等）、
先輩の教育実習後の感想と意見
3. 学習指導要領のねらい。幼・小・中・高等学校の一貫性ある教育。
教育課程編成。目的と目標。
4. 年間授業計画と学習指導案。指導案のいろいろ（様式、内容）
5. よい授業をするための教材研究と指導案のたてかた。
6. 指導方法、達成感・成就感等を味わわせる指導。学習形態。
発問、板書事項、チョークの使い方、机間指導等。評価とその活用。
7. 生徒指導（特に心の教育等）。生徒理解、教育相談、進路指導、同和教育。学校事故。
8. 道徳教育のねらい。資料準備及び指導案。
9. 特別活動のねらい特に学級活動の指導の実際。短学活の活動の指導。
10. 教師の一日 模擬授業（学級活動）
11. 職員会、学年会、教科会、朝の打合せ等への参加の心構え。校務分掌
12. 教育実習へ臨むことのまとめ。学校教育の今日的課題の討議と展望
レポート課題提示。

科 目 名	(新)日本史概説 (前期) (旧)日本史概説 (通年)	担当者名	新 井 孝 重
-------	--------------------------------	------	---------

講 義 の 目 標	前期には、古代から中世の変革の「法則」を具体的な歴史叙述をたどるなかで学びとる。 歴史を理論的、哲学的に学びたい。		
講 義 概 要	戦後歴史学の主要な学説は、領主制理論というものが主軸になっている。奴隷制的経済 制度を揚棄して、新たな経済制度である農奴制が形成されるが、そうした変革期中世農村 のすがたを、村落共同体、武士団、荘園制などの歴史事項を通して学ぶ。 歴史授業のくみたてと、そのための教材のあつかいかたを学ぶ。		
使 用 教 材	テ キ ス ト	石母田 正『中世的世界の形成』(岩波文庫) 歴史教育者協議会編『前近代史の新しい学び方』(青木書店)	
	参 考 文 献		
評 価 方 法	評価は、前期の定期試験の成績と出席状態にもとづいておこなうものとする。		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	大幅な遅刻のばあいは、入室を遠慮してもらいたい。(佳境へ入ったところで授業が攪乱さ れるから)		

1. 第1回目の授業。『中世的世界の形成』という書物のあつかうテーマ、叙述の構成を紹介して、これを読書することの学問的意義を論ずる。
2. 第1章 藤原実遠（私营田領主の没落）
3. 第2章 東大寺（荘園領主の古代的性格）
4. 第3章 源俊方（農村の領主）
5. 第4章 黒田悪党（領主制の敗北）
6. 壘田永年私財法と初期荘園の取り扱い
7. <古代文化の特質>（1）国風文化の特徴（2）平安貴族は何を食べたか
8. 前回のつづき（1）授業の反省（4）コメント
9. <中世社会の成立>（1）古代荘園から中世荘園へ（2）加藤・今野・木村の批判
10. 前回のつづき（3）公田制から荘園公領制へ（4）コメント
11. <中世国家と東アジア>（1）「歴史地理教育」にみる「元寇」学習（2）生徒の「元寇」認識と授業の展開
12. <中世文化史>（1）鎌倉新仏教のとらえ直しと授業
（2）南北朝文化の授業 （4）コメント

科 目 名	(新)日本史概説 (後期) (旧)日本史概説 (通年)	担当者名	駒 田 和 幸
-------	--------------------------------	------	---------

講 義 の 目 標	<p>歴史という学問は、人びとが未来を見つめ、進路を切り開こうとして、現在抱えている切実な問題に関心の日を向ける時、それまで歩んできた道程をあらためて客観的にとらえ直そうとする作業から始まる。歴史教育の側からいうと、歴史上のできごとが学習者たちの現在にどうつながっているのか、どんな問題を投げかけているのかを提示することが大切であろう。そのような視点から日本の近・現代史を考えることを目標とする。</p>		
講 義 概 要	<p>開国を契機に日本は欧米主導の世界に不平等条件を強いられる形で船出した。不平等条約から脱するため、日本は西欧の国家や社会をモデルにした文明国—国家のあり方としては国民国家—をめざした。その歩みはしかしアジアへの侵略を伴うものであった。こうした近代日本の歩みのなかからいくつかのテーマを取り上げ、共に考えていきたい。</p>		
使 用 教 材	テキスト	特に定めないが、資・史料をプリントして配付する。	
	参 考 文 献	授業中に随時紹介する。	
評 価 方 法	筆記試験と出席状態にもとづいておこなうものとする。		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	積極的な議論を期待したい。		

年
間
授
業
計
画

1. 日本の近・現代史を学ぶ意義について
2. 開国について—日本の近代の始まり
3. 欧化と国粹をめぐって(1)
4. 欧化と国粹をめぐって(2)
5. 国民国家の形成について—自由民権運動をめぐって
6. 国民国家の成立について—国語を中心に
7. 近代日本のアジア認識について(1)
8. 近代日本のアジア認識について(2)
9. 工業化と技術の発達について(1)
10. 工業化と技術の発達について(2)
11. 教育の発達について(1)
12. 教育の発達について(2)

科 目 名	(新) (旧)外国史概説 (後期)	担当者名	兼 田 信一郎
-------	----------------------	------	---------

講 義 の 目 標	中国の歴史、特に秦漢～隋唐期を概観する。21世紀は中国の時代となるという声をよく耳にするが、1980年代以降の急激な経済的発展は確かにそうした見方の論拠になるものである。しかし、日本の伝統文化に決定的影響を与え、今また経済的関係を深めつつあるこの中国社会は、それを構成する人々の、日本人との身体的類似性とは裏腹に、全く異質な社会と言える。講義では前近代の史的展開を概観しつつ、伝統中国社会の特殊性について考えてみたい。		
講 義 概 要	歴史をみる起点は常に現代にある。そこでまず現代中国の概況を資料を用いて示し、現代中国のかかえる「伝統と近代化」の問題に焦点をあて、「伝統」がどのような歴史的推移の中で生み出されてきたかを、古代・中世史の概説を通して説明してゆく。		
使 用 教 材	テキスト	特に指定しない、毎回プリントを配布する。	
	参考文献	授業中に適時示すが、以下の2冊は講義を理解する上で必要。 西嶋定生『中国古代の社会と経済』(東京大学出版会、1981年) 大沢正昭編『主張する<愚民>たち』(角川書店、1996年)	
評 価 方 法	出席点と筆記試験		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	講義中に紹介する文献の内最低一冊は読み、勉強すること		

1. オリエンテーション
2. 現代中国の姿 -- 地理的概況・経済・社会 --
3. 戦後日本における「中国」認識 -- 中国古代史研究を中心に --
4. 中国古代・中世史概説1 (新石器～殷周)
5. " 2 (春秋戦国)
6. " 3 (秦・漢)
7. " 4 (南北朝)
8. " 5 (隋・唐)
9. " 6 (唐宋变革期)
10. まとめ1 中国の専制王朝と在地社会 -- 中国社会を考える --
11. まとめ2 " -- 中国の法と裁判 --

科 目 名	(旧)外国史概説 (後期)	担当者名	熊 谷 哲 也
-------	---------------	------	---------

講 義 の 目 標	西アジアの歴史について学ぶ。ある意味では、イスラーム世界は我々の視野から最も遠い世界と言えるかも知れない。そこに生きる人々について、今日的な問題関心から、彼らの社会や文化に対する興味を掘り下げてみたい。		
講 義 概 要	歴史を理解しようとする姿勢は、現代的な問題関心と表裏一体であるべきだ。ここではまずパレスチナ問題や旧ユーゴーの問題などを知ることによって、現代的な関心を高めることから始めたい。イスラーム教にかんする基本的な知識もあわせて理解する。		
使 用 教 材	テキスト	とくに定めない。	
	参考文献	授業で指示する。	
評 価 方 法	出席点と筆記試験。		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど			

1. オリエンテーション。イスラームの基本事項について説明する。
2. ユダヤ教・キリスト教とイスラーム教との関係について理解する。これら 3 者の関係は今日の国際情勢を理解するうえでも重要である。
3. 預言者によって建設された宗教共同体が、やがて広大なイスラーム世界として拡大する様相を概観する
4. イスラーム世界における近代化の問題を、西洋とのさまざまな関係から考える。
5. パレスチナ問題 第 2 次中東戦争まで。
6. パレスチナ問題 第 4 次中東戦争とその後について。
7. 旧ユーゴスラビアの民族問題 ポスニア紛争までの歴史を中心に。
8. 旧ユーゴスラビアの民族問題 コソボ問題と NATO。
9. 旧ソ連のカスピ海沿岸、中央アジア諸国の問題 旧ソ連時代から独立まで。
10. 旧ソ連のカスピ海沿岸、中央アジア諸国の問題 現在の諸問題を中心に。
11. ポスト冷戦時代と、イスラーム諸国をめぐる様々な問題について。
12. まとめ 文明の衝突論とその是非をめぐって。

科 目 名	(新)外国史概説 (旧)外国史概説 (後期)	担当者名	古 川 堅 治
-------	---------------------------	------	---------

講 義 の 目 標	歴史学と歴史教育の接点、そして両者の関係の仕方を、最新の研究成果を念頭におきながら概説的に把握しつつ、歴史の教え方についてどのように考えるべきかを外国史 - 本年度はヨーロッパ古代史 - を中心に理解することを目標とする。		
講 義 概 要	講義はビデオやLDなど映像を使いながら概説的に説明するが、積極的な議論が湧き上がることも期待したい。授業では、アト・ホームな雰囲気の中にも、何よりも歴史の面白さと厳しさを伝えていきたいと考えている。		
使 用 教 材	テキスト	特に使用するということはしない。資・史料をプリントとして配布。	
	参考文献	最初の授業で「参考文献一覧表」を配布するので、適宜、図書館で参考にする。	
評 価 方 法	基本的にはレポート提出により評価するが、出席や議論への参加度合も考慮する。		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	教員を志望して授業に臨むはずであるから、個々人が主体的・積極的に授業を作り上げるという姿勢で参加して欲しい。		

年 間 授 業 計 画	<p>1. 「はじめに」 年間授業計画の概要と授業の進め方等について詳しく説明する。</p> <p>2. 「地中海世界の形成」 古代、東地中海世界が形成されていく諸要因とその構造について解説する。</p> <p>3. 「ミケーネ世界の崩壊からポリス社会への移行（その1）」 「海の民」をめぐる問題と「トロイア戦争」について。</p> <p>4. 「ミケーネ世界の崩壊からポリス社会への移行（その2）」 「暗黒時代」の評価をめぐる問題について。</p> <p>5. 「ポリスの形成過程」 前時代と連続している地域と断絶している地域での場合について。</p> <p>6. 「ポリス社会の特質とその歴史的発展」 アテネとそれ以外の地域でのポリス社会のあり方について。</p> <p>7. 「ポリス社会からヘレニズムの領域国家へ」 ポリスは何故衰退したのか。何故、ヘレニズム領域国家が支配的となり得たか、について。</p> <p>8. 「ローマとギリシア」 ローマの都市的発展と共和制の構造について。</p> <p>9. 「ローマ市民の国家と社会」 ローマ人の行政への関与、家族生活について。</p> <p>10. 「ローマ帝国の形成とその構造」 何故ローマは広大な支配を及ぼし得たのか、また、その支配構造とはどのようなものなのかについて。</p> <p>11. 「ローマ帝国の滅亡と新しい時代への移行」 ローマ帝国の滅亡の原因論と新しい時代への移行のプロセスを問う。</p> <p>12. 「まとめ ～歴史を学ぶことの意味～」 何故、歴史を学ぶのか、について。</p>
----------------------------	---

科 目 名	(旧)外国史概説 (後期)	担当者名	久 慈 栄 志
-------	---------------	------	---------

講 義 の 目 標	<p>本年は 2000 年代の幕開けであると同時に 20 世紀最後の年でもある。 今世紀は科学技術の比類なき発展と、それに連なる「物質文明」の頂点を極めた時代であったと言ってよい。しかし 21 世紀は「物質万能」から「精神的豊かさ」へ価値観の中心が大きく移りつつあることを誰もが実感しはじめているだろう。 今日、人類が抱えている諸問題は数多く、しかも難問ばかりである。本講義がそれらを解決する為の糸口のひとつとなることを願っている。</p>		
講 義 概 要	<p>ヨーロッパの「近代化の過程」を多角的に考察し、日本と比較しつつ、その功罪を論じたい。 また、受講者が社会科(地歴・公民)教員を志望する学生が多いことを考慮し、時事問題を適宜とりあげ、問題意識の啓発・構築に供したいと考えている。</p>		
使 用 教 材	テキスト	特に指定しないが下記の参考文献中 1~2 冊は目を通してほしい。	
	参考文献	<ul style="list-style-type: none"> ・西嶋定生、木村尚三郎他編「世界歴史の基礎知識」有斐閣 ・吉田悟郎「世界史学講義(下巻)」~第三世界と世界史学~御茶の水書房 ・リチャード・J・エヴァンズ「歴史学の擁護」晃洋書房 ・大谷瑞郎「歴史の論理」~封建から近代へ~刀水書房 	
評 価 方 法	最終回の授業時に試験を実施。(論述形式、ノート等持込み不可)		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	同時代人的視点で歴史事象を捉える姿勢で臨んでもらいたい。		

1. オリエンテーション

本講義の目的。歴史学の役割と学ぶ姿勢。

2. 「近代」の概念について

ヨーロッパ中心史観に起因する「近代」の概念について考察する。

3. 同 上

4. 市民革命

英・仏両革命における共通性と異質性を分析し、両国の国民性を考える。

5. 商業革命

価値観の転換と資本主義の胎動、ヨーロッパ優位を前提とした世界分割について考える。

6. 同 上

7. 産業革命

イギリスを例にとり、その「魔力」と、社会的諸矛盾をあぶり出し、社会主義運動の必然性にも言及したい。

8. 同 上

9. 「近代」総括

ヨーロッパ諸国の近代化過程を振り返り、その業績を正・負両面から分析し、「近代」のまとめとしたい。

10. 同 上

11. 今後の課題

21世紀、地球全体が直面する人口問題と食糧危機について問題提起する。

12. 予備

科 目 名	(新)地理学概説 (前期) (旧)地理学概説 (通年)	担当者名	秋 本 弘 章
-------	--------------------------------	------	---------

講 義 の 目 標	自然環境と人間の関わりについて、地理学的観点から具体的な事例をもとに考察する。		
講 義 概 要	身近な地域の環境を自然地理学を用いて分析する。基礎として、地形図の利用法を身につけた後、東京を中心とする関東地方の自然地理的特色と人々の関わりを分析する。		
使 用 教 材	テキスト	特に指定はしない。講義中の資料を配布する。	
	参考文献	貝塚爽平『東京の自然史』紀ノ国屋書店 杉谷・平井・松本『風景のなかの自然地理』古今書院 ほか、講義中に示される。	
評 価 方 法	試験とレポート(小課題) 出席状況を加味して行う。		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	地理学概説 および地誌学概説 、 をあわせての受講が必要である。		

1. 講義の概要、地理学の諸分野
2. 地形図利用の基礎(1) 地形図の種類、地形図の基礎知識
3. 地形図利用の基礎(2) 地形図の読図法、平野の小地形
4. 山の手と下町(自然の力と人間の力)
5. 下町の地形的特色(埋め立て地と沖積低地)
6. 東京の東郊と北郊(河川と人間)
7. 東京湾と埋め立て地(海への拡大)
8. 山の手と武蔵野台地(洪積台地の形成と氷河期、関東ローム)
9. 東京の西郊(武蔵野台地の開発史)
10. 関東地方の自然災害(1) 水との戦い
11. 関東地方の自然災害(2) 関東大震災、阪神・淡路大震災をふまえて
12. まとめ 自然と人間

科目名	(新)地理学概説 (後期) (旧)地理学概説 (通年)	担当者名	秋本弘章
-----	--------------------------------	------	------

講義の目標	地理学の基本的概念を理解し、これらの概念を用いて、どのような研究が行われてきたかを展望する。		
講義概要	地理的知識の拡大と地理学の歴史を述べた後、主要概念のうち、「立地」「伝播」「景観」について概説する。さらに、人文地理学のいくつかのテーマをとりあげ、理解の深化を図る。		
使用教材	テキスト	特に指定はしない。講義中資料を配布する。	
	参考文献	中村・高橋ら編 地理学講座 全6巻 古今書院 ほか、講義中に示される。	
評価方法	試験とレポート(小課題) 出席状況を加味して行う。		
受講者に対する要望など	地理学概説 および地誌学概説、 をあわせての受講が必要である。		

1. 講義の概要、地理的視野の拡大
2. 地理学の伝統と革新
3. 主要概念の理解 地域と環境
4. 主要概念の理解 立地
5. 主要概念の理解 伝播
6. 主要概念の理解 景観
7. トピック 1 地図と地理学
8. トピック 2 スポーツと地理学
9. トピック 3 観光と地理学
10. トピック 4 メンタルマップ - 頭のなかの地図
11. トピック 5 時空間地理学 - 生活行動の分析
12. まとめ

科 目 名	(新) (旧)地誌学概説 (前期)	担当者名	秋 本 弘 章
-------	----------------------	------	---------

講 義 の 目 標	特定の地域を対象とする地誌学は、地理学のなかで重要な位置を占めている。地誌学における重要な主要概念である「地域」と「地域分析法」を理解した上で、日本を事例地域として地誌学的見方を身につける。		
講 義 概 要	まず、地理学における地誌学の位置、ならびに地誌学における重要な概念である「地域」を理解し、地域を扱う上で必要な文献等の利用法、地域分析の手法を修得する。そのうえで、日本を事例として、自然環境、歴史的背景、地域文化、産業構造、国際関係等とそれらの関連を考察する。		
使 用 教 材	テキスト	特に指定はしない。講義中に資料を配布する。	
	参考文献	中村・高橋ら編 地理学講座 全6巻 古今書院 ほか、講義中配布される資料に示される。	
評 価 方 法	試験とレポート(小課題) 出席状況を加味して行う。		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	地理学概説、および地誌学概説 をあわせて受講することが望ましい。		

1. 講義の概要、地域概念の考察
2. 地域分析の基礎(1) 文献・資料・統計の所在と検索
3. 地域分析の基礎(2) 地図とその利用、統計地図の作成
4. 地域構造の把握(1) 地域区分の方法
5. 地域構造の把握(2) 地域構造図、地域構造モデル
6. 地域分析の手法 GIS(地理情報システム)
7. 日本地誌(1) 自然環境
8. 日本地誌(2) 風土と地域文化
9. 日本地誌(3) 人口分布と人口構造
10. 日本地誌(4) 産業構造(1)
11. 日本地誌(5) 産業構造(2)
12. 日本地誌(6) 国際化と日本

科 目 名	(新) (旧)地誌学概説 (後期)	担当者名	秋 本 弘 章
-------	----------------------	------	---------

講 義 の 目 標	地誌学 につづき、世界を事例としてあつかう。		
講 義 概 要	世界の地域構造を概観した後、ヨーロッパとモンスーンアジアをとりあげ、地誌学的観点から考察を加える。		
使 用 教 材	テキスト	特に指定はしない。講義中資料を配布する。	
	参考文献	T.G. ジョーダン著 山本他訳『ヨーロッパ文化』 大明堂 アジア地理研究会編『変貌するアジア』古今書院 ほか、講義中配布される資料に示される。	
評 価 方 法	試験とレポート(小課題) 出席状況を加味して行う。		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	地理学概説、および地誌学概説 をあわせての受講が必要である。		

1. 地域の見方と世界の地域構造
2. ヨーロッパ地誌(1) 範囲と自然環境
3. ヨーロッパ地誌(2) 人種と民族
4. ヨーロッパ地誌(3) 宗教と言語
5. ヨーロッパ地誌(4) 国家と地域統合
6. ヨーロッパ地誌(5) 経済地誌と地域構造
7. モンスーンアジア地誌(1) 範囲と自然環境
8. モンスーンアジア地誌(2) 歴史的背景と民族・国家
9. モンスーンアジア地誌(3) 特色ある生活と文化
10. モンスーンアジア地誌(4) 産業構造と変化
11. モンスーンアジア地誌(5) 日本とモンスーンアジア
12. 講義のまとめ

科 目 名	(旧)地理学調査法(前期)	担当者名	松 本 栄 次
-------	---------------	------	---------

講 義 の 目 標	調査地域に赴いて資料を収集するフィールドワークが地理学の調査研究のもっとも基本的な作業であり、地理教育においても地域の調査は重要視されている。この講義では、とくに地域の理解に欠かせない自然環境と土地利用に関するフィールドワークについて、その準備・実行・資料整理の方法などを解説する。		
講 義 概 要	具体的地域(とくに大学周辺地域)を題材にして、自然環境と土地利用の調査に必要な基礎的テクニックについて講義および実習を行う。また、自然環境と人間に関する具体的な地理学調査研究の例を紹介する。		
使 用 教 材	テキスト	使用しない。	
	参考文献	授業中に適宜紹介する。 その他：地形図1~2枚(授業中に指定する)	
評 価 方 法	学期末のレポートと出席状況を総合して判断する。		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	実習に使用する鉛筆・色鉛筆(3色程度)・定規を用意すること。		

1. 序説：地理学および地理学研究の方法
2. 地図の利用 1：地図の種類と特徴、地図の用途・入手法
3. 地図の利用 2：位置・距離・面積など基本情報の獲得
4. 地図の利用 3：地形判読の実習
5. 地図の利用 4：土地利用判読の実習
6. 空中写真の利用 1：空中写真から得られる基本情報
7. 空中写真の利用 2：空中写真判読の実習
8. 測量の原理と簡易測量法
9. 平野地域における土地条件と土地利用の野外調査
10. 山地・丘陵地域における土砂災害の調査法
11. 地生態系とその各要素の調査法
12. まとめ

科 目 名	(新) 法律学概説 (経済学部「法学」と合併)	担当者名	花 本 広 志
-------	----------------------------	------	---------

講義の目標	法の在り方と法律学についての基礎的な理解力と判断能力を養成することを目的とする。法律学は、あまりとりつきのよい学問ではなく、また、法律そのものにも難解な部分があるが、近年出版された優れたテキストを利用して、できる限り興味を持てるような講義としたい。		
講義概要	全体を4期に分ける。第一は、民法であり、財産と家族について論ずる。第二は、刑法であり、犯罪と刑罰について論ずる。第三は、公法であり、個人・社会・権力について論ずる。第四は、法律学論であり、法のしくみと運用について論ずる。講義は、比較的日常生活に近い、第一の民法部門から始める。		
使用教材	テキスト	佐藤幸治ほか編『法律学入門』有斐閣、(1900円程度)	
	参考文献		
評価方法	年2回の学期末テストを中心に評価する。		
受講者に対する要望など	興味が持続するように努力して講義するので、継続して出席して欲しい。		
年間授業計画	1. 財産と家族 1 私的自治の原則 契約と民法の関連 2. 財産と家族 2 私的自治の原則(続) 契約の種類 3. 財産と家族 3 法律行為 法律行為 4. 財産と家族 4 権利の主体 1 自然人 5. 財産と家族 5 権利の主体 2 法人 6. 財産と家族 6 権利の主体 3 会社 7. 財産と家族 7 権利の客体 1 所有権 8. 財産と家族 8 権利の客体 2 担保物権 9. 財産と家族 9 不法行為 1 過失責任主義 10. 財産と家族 10 不法行為 2 無過失責任 11. 財産と家族 11 家族 1 夫婦 12. 財産と家族 12 家族 2 親子 13. 犯罪と刑罰 1 刑法の役割と基本原則 14. 犯罪と刑罰 2 刑罰の種類 15. 犯罪と刑罰 3 犯罪の要件 16. 犯罪と刑罰 4 刑事手続 17. 個人・国家・権力 1 個人と国家 18. 個人・国家・権力 2 国家と主権 19. 個人・国家・権力 3 個人と集団 20. 個人・国家・権力 4 国際社会 21. 法の仕組みと運用 1 法の特質と機能 22. 法の仕組みと運用 2 法源 23. 法の仕組みと運用 3 法律学 24. 法の仕組みと運用 4 法の解釈と裁判		

科 目 名	(新)政治学概説 (経済学部「政治学総論」と合併)	担当者名	鈴木朝生
-------	------------------------------	------	------

講義の目標	本講義は、政治学の入門講義として広く浅く基礎概念・用語法を概括的に説明し、それに慣れ親しむことを目的とする。		
講義概要	日本とイギリスという、相近似した政治制度をもつ国家を、制度のみならず実際をも含めて概観する。		
使用教材	テキスト	なし。	
	参考文献	阿部斉・新藤宗幸・川人貞史著『概説 現代日本の政治』(東大出版会)の中の幾つかの章と川北稔編『イギリス史』、松浦高嶺著『イギリス現代史』(いずれも山川出版社)の一部(フランス革命以降)を使う。その他『現代政治学事典』(ブレーン出版)、『西洋史辞典』(東京創元社)	
評価方法	前・後期二回の定期試験を行う。また、何らかの方法で出席をとる。		
受講者に対する要望など	講義初日は必ず出席のこと。また、履修確定時期までの間も欠席は欠席として評価する。携帯電話、PHSのスイッチは切っておくこと。		

年 間 授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーリング 講義のすすめ方・試験の要領等に関する注意 2. 明治国家から現行憲法体制へ 近・現代日本の政治の枠組みと現行憲法体制 3. 国会の機能 国家の諸機能、「立法国家」から「行政国家」へ 4. 日本の立法過程 立法部としての国会における立法過程の諸特徴 5. 議院内閣制 行政部としての内閣の機能と「55年体制」 6. 福祉国家化と行政機能 福祉国家化、社会保障制度 7. 日本の官僚制 ウェーバーの官僚制概念と日本の官僚制 8. 行革改革 行政改革の概念・歴史、行政改革と政治改革 9. 日本の選挙制度 選挙制度（衆議院・参議院）選挙制度改革 10. 日本の政党 「55年体制」とその後の変容過程 11. イギリス政治（1） 概観（議会、内閣、政党、選挙） 12. " （2） 議会の起源と変遷 13. " （3） 内閣の起源と変遷 14. " （4） 政党の起源と変遷 15. " （5） 選挙制度の起源と変遷 16. 近代イギリス政治史（1） フランス革命とその影響、第一次選挙法改正 17. " （2） 二大政党制の成立、ディズレイリとグラッドストーン 18. " （3） 三党政治から保守・労働二政党制へ 19. 現代イギリス政治（1） コンセンサス政治体制 20. " （2） 福祉国家への道 21. " （3） チャーチルと「豊かな社会」 22. " （4） サッチャリズム、コンヴィクションの政治 23. " （5） ブレアの政治（北アイルランド問題、地方分権他） 24. まとめ
----------------------------	---

科 目 名	(新)社会学概説 (旧)社会学概論	担当者名	有 吉 広 介
-------	----------------------	------	---------

講 義 の 目 標	<p>中学・高校の社会科教育のなかで取りあげられている社会学的知識・説明・解釈を中心として、現代の社会生活を理解するために必要な考え方を講義する。</p>		
講 義 概 要	<p>まず、社会的存在としての人間の諸相を考えるための基本的な概念を取りあげ、そのなかで、人間、社会および文化の相互関係を考察する。ついで、社会生活の基本単位といわれる家族集団が、近代化のさまざまな過程のなかでどのように変化してきたかを問題にする。特に核家族化の問題点を考察する。引き続いて、近代から現代にわたって展開してきた社会の産業化、都市化、大衆化、官僚制化、学歴社会化、情報化、および福祉化の諸現象について逐次ふれながら、現代の社会問題の基礎を明らかにする。最後に、今日解決をせまられている高齢社会の諸問題の背景に、現代社会のさまざまな構造的特質があることを指摘する。</p>		
使 用 教 材	テキスト	講義に必要な資料はプリントして配布する。	
	参 考 文 献	適時紹介	
評 価 方 法	<p>前期および後期の終わりに課題を示してレポートを提出してもらい、これを評価する。</p>		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	<p>授業を休まぬこと</p>		

年 間 授 業 計 画	<ul style="list-style-type: none"> 1. 社会行動の構造 2. 社会集団の構造と機能 3. 人間、社会、文化の相互関係 4. 家族の構造と機能 5. 家族制度・核家族化 6. 社会の産業化 7. 職業社会・雇用社会 8. 官僚制化 9. 大衆社会 10. 社会の階層化 11. 日本人の「中」意識の背景 12. 前期講義の補足 13. 都市化 14. 都市問題 15. 新しいコミュニティ 16. 学歴社会の性格 17. 日本の近代化と学歴尊重 18. 社会の情報化 19. 社会の福祉 生活の質の重視 20. 日本人の生活時間の使い方 21. 社会の高齢化 22. 高齢社会に対する日本人の意識 23. 高齢社会への対応 24. 後期講義の補足
----------------------------	--

科 目 名	(新) (旧) 哲学概説	担当者名	河 口 伸
-------	-----------------	------	-------

講 義 の 目 標	<p>昨今、哲学の復権が唱えられ、自分探しの一環として哲学が一種の流行となっているが、それらをも包摂し相対化する視点こそが、今求められている。一般教養としての哲学史的知識も教職に必要であるが、教師として以前に、一人の人間として真摯に生きるために「哲学」が持つ意義を考えてもらいたい。</p>		
講 義 概 要	<p>西欧思想を歴史的に辿ることが、本講義の概要であるが、そこには二つの偏りが存在していることを意識しつつ論じて行きたい。西欧哲学としての偏りと明治以降の輸入哲学としての偏りとである。哲学を、ギリシア起源の「学」としてのみ捉えるのではなく、幅広く「思想」として捉え、政治・社会・宗教・歴史・科学等への影響をも視野に入れて論じたい。</p> <p>個々の思想家の経歴や思想の細部の紹介は、テキストに譲り、彼らとその思想を形成した動機や課題、歴史的 position 付けなどを重視して論じる。</p>		
使 用 教 材	テ キ ス ト	「精神史としての哲学史」 角田幸彦編 東信堂	
	参 考 文 献	講義の際に随時指示する。	
評 価 方 法	<p>履修者の数によって変更はあり得るが、基本的には次の通り。前後期の定期試験、夏冬各1回のレポート提出、出席点を総合的に評価する（試験の点数にそれぞれ加算する）。出席が$\frac{2}{3}$以上に達しない者は評価に値しない。出欠は毎回とる。</p>		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	<p>講義に唯出席しているだけではなく、またノートをとるだけでもなく、自ら考えることを要望したい。</p>		

年 間 授 業 計 画	1. 哲学とは何か(1) 2. ソクラテス以前 3. ソクラテス 4. プラトン 5. アリストテレス 6. スコラ哲学 7. ルネサンスと宗教改革 8. 科学革命 9. 社会契約説 10. 啓蒙主義 11. 合理論と経験論(1) 12. 合理論と経験論(2) 13. カント 14. ドイツ観念論 15. キルケゴール 16. ニーチェ 17. マルクス 18. フッサール・ハイデッガー・ヤスパーズ(1) 19. フッサール・ハイデッガー・ヤスパーズ(2) 20. 歴史主義・解釈学 21. ウィトゲンシュタイン 22. 構造主義 23. 言語哲学 24. 哲学とは何か(2)
----------------------------	---

科 目 名	(新)倫理学概説 (旧)倫理学概論	担当者名	中 島 文 夫
-------	----------------------	------	---------

講 義 の 目 標	<p>高等学校で「倫理」を教えるためには、先ず自らが倫理について考える姿勢を身につけなければならない。これは、中学校において「道德教育」を実践するための精神的基盤としても不可欠である。併せて、そのために必要な基礎的教養を身につけさせることを意図する。</p>		
講 義 概 要	<p>1. 倫理学とはどういう学問であるか。学問の全体系の中でどういう位置を占めるか。 2. 主要概念 この中で、思想上重要な思想家の学説にも触れることになる。 3. 「交わりにおける自我」についての考察。</p>		
使 用 教 材	テキスト	使用しない。ただし、レジメのプリントを配布する。	
	参考文献	必要に応じて指示する。	
評 価 方 法	<p>前・後期共、筆記試験を行う予定。出欠は毎回点検し、評価の一要素とする。甚しく欠席の多い者には単位を与えない。</p>		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	<p>欠席・遅刻を当然の権利と考えることなく、欠席はもとより遅刻もしないように心がけ、授業中の私語を慎むなど、礼儀正しい態度を望む。</p>		

年 間 授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 倫理学とは何か。 2. 人間存在の個別的原理と普遍的原理 3. 主体としての人格(1) 4. 主体としての人格(2) 5. 主体としての人格(3) 6. 共同体(1) 7. 共同体(2) 8. 規範(1) 9. 規範(2) 10. 価値(1) 11. 価値(2) 12. 価値(3) 13. 道德意識(1) 14. 道德意識(2) 15. 徳と義務 16. 行為(1) 17. 行為(2) 18. 自由(1) 19. 自由(2) 20. 愛 21. 交わりにおける自我(1) 22. 交わりにおける自我(2) 23. 交わりにおける自我(3) 24. 交わりにおける自我(4)
----------------------------	--

科 目 名	(新)宗教学概説 (旧)宗教学概論	担当者名	河 口 伸
-------	----------------------	------	-------

講 義 の 目 標	戦後教育が宗教について意識的に或いは無意識的に避け続けて来た為、現代の日本人は宗教に関して一種の「真空状態」に置かれており、そこから様々な問題が今生じて来ている。そこで本講義は、宗教学の学的体系性よりも、むしろ諸宗教の歴史と現在についての一般的概括的知識を得られるようにすることを重点とする。更に教職科目であることにも鑑み、宗教教育のあり方についても論じたい。		
講 義 概 要	前期は、洋の東西、今昔を問わず世界史上の諸宗教の歴史と現在について説明し、宗教の果たして来た役割・問題点について考えてもらう。後期は、日本の宗教の歴史と、日本人の宗教的心性の形成にまず触れ、その後に宗教的諸概念についての理解を深め、日本や欧米の先進諸国において宗教集団が現在持っている意義や問題点を論じた上で、宗教教育の是非・可能性を論じる。		
使 用 教 材	テキスト	特になし。必要に応じてプリントを配布する。	
	参 考 文 献	講義の際に随時指示する。	
評 価 方 法	履修者の数によって変更はあり得るが、基本的には次の通り。前後期の定期試験、夏冬各1回のレポート提出、出席点を総合的に評価する(試験の点数にそれぞれ加算する)。出席が $\frac{2}{3}$ 以上に達しない者は評価に値しない。出欠は毎回とる。		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	講義に唯出席しているだけではなく、またノートをとるだけでもなく、自ら考えることを要望したい。		

年 間 授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 講義概要の説明及び宗教とは何か(1) 2. 神話と宗教 3. ユダヤ教 4. キリスト教(1) 5. キリスト教(2) 6. キリスト教(3) 7. イスラム教(1) 8. イスラム教(2) 9. 仏教(1) 10. 仏教(2) 11. ヒンドゥ教 12. 儒教及び道教 13. 日本の宗教の歴史と現在(1) 14. 日本の宗教の歴史と現在(2) 15. 日本の宗教の歴史と現在(3) 16. 日本の宗教の歴史と現在(4) 17. 宗教上の諸概念（儀礼、戒律、修行など）(1) 18. 宗教上の諸概念（儀礼、戒律、修行など）(2) 19. 宗教集団の諸問題(1) 20. 宗教集団の諸問題(2) 21. 学校教育と宗教(1) 22. 学校教育と宗教(2) 23. 宗教とは何か(2) 24. 宗教学の課題
----------------------------	--

科 目 名	(新)心理学概説 (旧)心理学概論	担当者名	林 潔
-------	----------------------	------	-----

講 義 の 目 標	<p>今日の心理学は実験心理学を中心としながらも、領域によっては精神分析や実存主義の影響を受けたアプローチもとり入れられています。</p> <p>心理学の問題や課題について、性格心理学、対人関係の問題を中心に考えてみたいと思います。</p>		
講 義 概 要	<p>基本的心理学的モデルを紹介します。そして性格についておさえ、対人関係の問題と課題へとすすみます。</p> <p>続いてストレスへの対応について基本的なものを紹介し、現在の生徒の当面している問題と、それについてのアプローチで全体を構成しています。</p>		
使 用 教 材	テキスト	なし	
	参 考 文 献	随時紹介	
評 価 方 法	<p>期末試験を主とします。レポート、平常点を考慮する場合があります。また、教職科目なので授業出席も単位取得の条件です。レポート、質問は下記の E-mail を利用されてもよいです。</p>		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	<p>積極的に質問して下さい。あとから思いついたら E-mail (hayashi@shiraume.ac.jp) を使って下さい (1000 字を超えたら分けて送信して下さい)</p>		

年 間 授 業 計 画	<p>1. はじめに。 全体の解説。</p> <p>2. 心理学のモデル(1) 学習モデルと認知モデル。</p> <p>3. 同 (2) 精神分析モデル(1) 自我構造。</p> <p>4. 同 (3) 同 (2) リビドーの発達。</p> <p>5. 同 (4) 同 (3) 防衛機制。</p> <p>6. 性格心理学(1) 性格の類型論(クレッチマーの体格と性格、ユングの内向・外向)</p> <p>7. 同 (2) 類型論(タイプA、タイプC) 特性論</p> <p>8. 交流分析について(1) 対人関係の理解として交流分析について紹介します。構造分析</p> <p>9. 同 (2) 構造分析の続き。エゴグラム(交流分析の性格検査)</p> <p>10. 同 (3) 交流パターン分析</p> <p>11. 同 (4) 人間の基本的態度、禁止令など交流分析のまとめ。</p> <p>12. 対人関係の心理(1) 人はなぜ人間関係をもつのかということについて考えます。</p> <p>13. 同 (2)</p> <p>14. 対人認知の歪み 相手を正確に捉えることは難しい。歪みのパターンについて。</p> <p>15. ストレスとストレス対処(1) 今日的なテーマ、ストレスの問題について考えます。</p> <p>16. 同 (2) 自己催眠などいくつかの方法の紹介します。やってみませんか?</p> <p>17. 今日の心理学会の動向 日本心理学会の最近の動向について紹介します。</p> <p>18. 青年期の問題と対処(1) 中・高生の特徴的問題についてとりあげます。登校拒否</p> <p>19. 同 (2) 進路の問題について。</p> <p>20. 同 (3) 学校適応</p> <p>21. 同 (4) 対人関係の問題</p> <p>22. 同 (5) 非行について</p> <p>23. サイコエデュケーション 問題についての予防的・開発的試みとしての人間関係訓練。</p> <p>24. まとめと展望</p>
----------------------------	--

科 目 名	図書館概論（前期）	担当者名	小 川 剛
-------	-----------	------	-------

講 義 の 目 標	<p>図書館とは、「真理がわれらを自由にする」をモットーに、人びとの様々な活動を、そこで求められる資料・情報等への要求に的確に応えることで、支えていく社会的施設である。その様態は、施設の設置目的により多様である。各図書館に共通する問題ならび固有の問題を概観する。いわゆる図書館入門である。</p>		
講 義 概 要	<p>自分たちの生活のなかでの図書館体験を再確認することを出発点とする。そして図書館に共通する特質を検討し、具体的な状況で、それぞれ機能を果たしている各種の図書館の固有の問題の検討を通して、全体としての図書館の構造をあきらかにする。</p>		
使 用 教 材	テキスト	塩見 昇『図書館概論』、日本図書館協会、1998年	
	参考文献	適宜指示する。	
評 価 方 法	学年末試験		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	様々な図書館を積極的に利用し、図書館体験を豊かにしておくこと		

1. オリエンテーション、図書館についての包括的な理解
2. 図書館の理念
3. 図書館の概念
4. 図書館の基本問題 - 「図書館の自由」、「図書館員の倫理綱領」
5. 図書館行政をめぐる問題
6. 地域社会と図書館
7. 公共図書館
8. 学校図書館
9. 大学図書館（学術情報センターも含めて）
10. 専門図書館
11. 国立国会図書館
12. まとめ

科 目 名	図書館サービス経営論	担当者名	小 川 剛
-------	------------	------	-------

講 義 の 目 標	<p>住民の利用を前提に設立された公共図書館のサービスに焦点を当て、そのあり方ならびす すめ方について述べる。その活動内容は多岐にわたるが、それらをいくつかのカテゴリーに 分けて、サービス内容の構造的把握をめざす。図書館経営に当っては、経営学の成果に学び ながら、その効果的、効率的な運営のしかたををあきらかにする。</p>		
講 義 概 要	<p>資料保存から資料活用へと図書館のあり方を根本的に変えた公共図書館の成立過程をあき らかにし、サービス提供主体としての公共図書館のあり方を明らかにする。そして、そこで 展開される各種サービスをカテゴリー化して、公共図書館におけるサービスの実態とその全 体構造を検討する。後半においては、多様な図書館サービスを効果的・効率的に展開してい くために経営学の成果に学びながら経営論を検討する。</p>		
使 用 教 材	テ キ ス ト	未定	
	参 考 文 献	適宜指示	
評 価 方 法	期末試験		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	図書館でのサービス体験を豊かにし、疑問を抱いて聴講してほしい		

年 間 授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none">1. 公共図書館の成立(1)2. 公共図書館の成立(2)3. 公共図書館の成立(3)4. わが国における公共図書館サービスの形態の確立5. 資料の収集・整理・保存6. 資料の提供(1)7. 資料の提供(2)8. レファレンス・サービス9. 児童サービス10. 各種のハンディをもつ人びとへのサービス11. 各種集会活動12. サービス論のまとめ13. 図書館経営の基本的な考え方14. 図書館業務の理論と実際15. 図書館関係法規16. 図書館の組織17. 図書館の職員18. 図書館の計画19. 図書館経営でのマーケティング手法の適用20. 図書館の施設設備計画21. 図書館ネットワークの形成22. 図書館業務・サービスの評価23. 経営論のまとめ
----------------------------	--

科 目 名	情報サービス論	担当者名	福 田 求
-------	---------	------	-------

講 義 の 目 標	<p>本講義での情報サービスとは、図書館の情報提供機能を具体化するサービス全般のことをいうが、これにはレファレンスサービスやカレントアウェアネスサービス、さらには CD-ROM やオンラインの検索サービス等、さまざまなサービスが含まれうる。本講義ではこの情報サービスの総合的な理解を目指し、情報サービスに関する解説と演習を行う。</p>		
講 義 概 要	<p>前期では、図書館の情報サービスについての基本的な事項を解説する。また後期においては主に、情報サービス（特にレファレンスサービス）の実践的能力を養成するために、参考図書等さまざまな情報源を用いた検索および回答の演習を行う。</p>		
使 用 教 材	テキスト	指定しない。	
	参考文献	適宜紹介する。	
評 価 方 法	前期：レポート。後期：学期末試験。		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	<p>受講希望者数が教室の定員を万一超えた場合は抽選を行うので、登録手続について、司書課程のオリエンテーションや免許課程係窓口で注意事項をきちんとチェックすること。</p>		

年 間 授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 受講者の確認・決定。年間予定、授業方法等の注意事項について説明。 2. 情報サービスの概要 3. 情報サービスの種類(1)：基本的サービス 4. 情報サービスの種類(2)：発展的サービス 5. 情報源の種類 6. 情報ニーズ論 7. 情報サービスにおける検索と回答 8. 情報サービス管理論 9. 事実検索の情報源(1)：情報源の種類、辞書 10. 事実検索の情報源(2)：事典、便覧・図鑑 11. 事実検索の情報源(3)：歴史、統計、地理、人物の情報 12. 前期のまとめ 13. 文献検索の情報源(1)：情報源の種類、書誌 14. 文献検索の情報源(2)：目録、記事索引 15. 情報サービスにおけるデータベース利用 16. 情報源の評価 17. 情報源の組織 18. 情報源の作成 19. レファレンスプロセス 20. 情報検索と回答の実際(1)：情報源、ことば 21. 情報検索と回答の実際(2)：ことがら 22. 情報検索と回答の実際(3)：日時、地理、人物情報 23. 情報検索と回答の実際(4)：書誌情報 24. まとめ
----------------------------	---

科 目 名	情報検索演習（前期）	担当者名	高 柳 敏 子
-------	------------	------	---------

講 義 の 目 標	<p>情報検索システムの一連の流れの中で、蓄積段階として、情報の入手、主題分析、検索キーの作成、索引、データベース等を理解し、続いて検索段階として、情報要求、検索質問、検索式、シソーラスの利用、索引との照合、検索結果、検索の評価等を理解する。</p> <p>検索式を作成する、シソーラスを利用する、索引との照合をする、検索結果を得るといった過程では、オンラインやCD-ROM等によるデータベース検索の実習をできるだけ多く体験し、実践的な能力を養うことを目指す。</p>				
講 義 概 要	<p>情報検索システムの蓄積段階および検索段階を概観する。蓄積段階では、一次資料から二次資料への情報の加工の過程で、情報の入手、主題分析、検索キーの作成、索引、データベースといった処理項目を、検索段階では、情報要求、検索質問、検索式、シソーラスの利用、索引との照合、検索結果、検索の評価といった処理項目を順を追って解説する。検索式の解説では演算子を使用した検索条件の表現方法を、またシソーラスについては、その目的とシソーラスの構成を、検索の評価では再現率と適合率について学ぶ。</p> <p>実践的な情報検索能力を養うために、オンライン検索では、インターネット上の各種情報検索システムをできるだけ活用し、CD-ROMを使用したオンライン検索では、練習用J-BISCによる実習および最近のマルチメディア事典等も扱ってみる。</p>				
使 用 教 材	<table border="1"> <tr> <td>テキスト</td> <td>渡辺満彦、北克一、澤井清、原田智子共著 「情報検索演習」新・図書館学シリーズ6、樹村房、1998 .</td> </tr> <tr> <td>参考文献</td> <td>細野 公男 編「情報検索」講座図書館の理論と実際5、雄山閣、1991 .</td> </tr> </table>	テキスト	渡辺満彦、北克一、澤井清、原田智子共著 「情報検索演習」新・図書館学シリーズ6、樹村房、1998 .	参考文献	細野 公男 編「情報検索」講座図書館の理論と実際5、雄山閣、1991 .
テキスト	渡辺満彦、北克一、澤井清、原田智子共著 「情報検索演習」新・図書館学シリーズ6、樹村房、1998 .				
参考文献	細野 公男 編「情報検索」講座図書館の理論と実際5、雄山閣、1991 .				
評 価 方 法	2 回程度のレポートの提出、定期試験および出席を加味して評価する。				
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	MS-Windows、MS-Word、および MS-Excel の取り扱いに慣れていること。また、受講者数の確認のため、第 1 回目の授業には必ず出席すること。				

1. ガイダンス
情報、情報検索とは
2. 情報検索システム
情報検索システムの蓄積段階と検索段階
3. 検索演習(1)
OPACとインターネット
4. 蓄積段階の諸項目
一次資料と二次資料、情報の入手、主題分析、検索キー、索引
5. 情報検索とデータベース
データベースとは
6. 検索段階(2)
オンライン検索、CD-ROMの利用
7. 検索段階の諸項目(1)
情報要求、検索質問、検索式
8. 検索段階(3)
教材用J - BISCの実習
9. 検索段階の諸項目(2)
検索結果の評価、再現率、適合率
10. 検索演習(4)
シソーラス等検索用辞書の利用、JOIS体験
11. オンライン検索とインターネット
インターネットとサーチエンジン、電子図書館
12. 検索演習(5)
総合的な検索演習およびまとめ

科 目 名	情報検索演習・資料特論 (経済学部「情報検索論」と合併)	担当者名	福 田 求
-------	---------------------------------	------	-------

講 義 の 目 標	必要な情報を効果的に選択，入手する行為としての「情報検索」について理解を深める。特に，コンピュータ技術に基づく情報検索システムの知識を，解説および実習を通して体得する。		
講 義 概 要	本講義ではまず，情報検索に関する基礎的な概念について解説し，情報検索を取り巻くシステムの仕組みを概観する。そしてその知識を踏まえた上で，実際の情報検索技術に慣れ，習熟するために，CD-ROMによる情報検索の実習を行う。次に，情報検索のサービスについて説明し，さらにオンラインの情報検索サービスの実際の利用を通して，情報検索の理解を深める。そして最後に，新たな情報検索の場としてインターネットを取り上げ，これについても実習を行う。実習では可能なかぎり，受講者が今後の調査／研究活動で利用できるような情報源（CD-ROM，オンライン）を紹介する。		
使 用 教 材	テキスト	使用しない。	
	参考文献	適宜指示する。	
評 価 方 法	前期および後期の定期試験。これに平常点（実習への参加態度等）を加味する。		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	受講者の抽選を行うので，第一回の授業には「必ず」出席すること。		

年 間 授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション：受講者の確認・決定。年間予定，授業方法等の注意事項について説明。 2. 情報検索概論(1)：情報検索の定義，種類，歴史について解説。 3. 情報検索概論(2)：データベースの定義，意義，構成要素について解説。 4. 情報検索概論(3)：データベースの種類，歴史について解説。 5. 情報検索概論(4)：第7回以降の実習で用いる索引言語について解説。 6. 情報検索概論(5)：第7回以降の実習で用いる検索式について解説。 7. CD-ROM 検索(1)：実習 8. CD-ROM 検索(2)：実習 9. CD-ROM 検索(3)：実習 10. CD-ROM 検索(4)：実習 11. CD-ROM 検索(5)：実習 12. 前期講義のまとめ 13. 情報検索サービス(1)：情報検索サービスの定義，意義，歴史，種類について解説。 14. 情報検索サービス(2)：情報検索サービスの利用について解説。 15. オンライン検索(1)：実習 16. オンライン検索(2)：実習 17. オンライン検索(3)：実習 18. オンライン検索(4)：実習 19. 新しい情報検索の動向：インターネットなど新たな情報検索の領域を紹介。 20. インターネットによる情報検索(1)：実習 21. インターネットによる情報検索(2)：実習 22. インターネットによる情報検索(3)：実習 23. インターネットによる情報検索(4)：実習 24. まとめ
----------------------------	--

科 目 名	図書館資料論（後期）	担当者名	高 野 彰
-------	------------	------	-------

講 義 の 目 標	<p>図書館とは種々の図書館資料を用意し、利用者の要求に答えようとするサービス機関であるから、商品（図書館資料）に対する知識を十分に備えてサービスをする必要がある。本講ではそうした知識を総合的に習得できるようにする。</p>		
講 義 概 要	<p>図書館ではどんな資料を取扱い、それらはどんな特徴を持っているのか、それらを収集するということはどんな目的なのか、収集された資料はどのように管理するのか、これらの諸点について事例をあげて説明すると共に、問題点については、できれば、対話形式で講義をする。</p>		
使 用 教 材	テキスト	使用しない	
	参 考 文 献	講義の時に列挙する。	
評 価 方 法	<p>期間中のレポートと期末試験 出席状況</p>		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど			

1. 図書館資料の種類とその特徴
2. 出版物の生産と流通
3. 蔵書の形成
4. 資料の選択
5. 分担収集
6. 保存及び資料管理

科 目 名	専門資料論（前期）	担当者名	松 山 巖
-------	-----------	------	-------

講 義 の 目 標	人文科学、社会科学、自然科学、医学、工学などの各学問分野の専門文献や、行政資料、郷土資料などの資料を、適確かつ迅速に入手するために必要な知識を学ぶ。		
講 義 概 要	<p>学術資料を中心とする専門資料については、なじみのない学生も多いことと思われるので、基本的な知識から始めたい。まず広大な種々の学問の世界を概観し、知識がどのように構造化されているかをみる。その上で、学問分野をどのように分けるか；各学問分野の研究活動のスタイルにはどのような特徴があるか；学術情報が生まれ、流通し、利用され、変化していくプロセスはどうなっているか；各分野ごとの資料の種類、特性、入手方法にはどのような違いがあるか；各情報にアクセスするために2次資料をどのように活用するか、などについてみていきたい。</p>		
使 用 教 材	テキスト	特になし。	
	参考文献		
評 価 方 法	出席及びレポート。		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど			

科 目 名	資料組織概説（前期）	担当者名	松 山 巖
-------	------------	------	-------

講 義 の 目 標	資料の組織化の必要性、歴史、各種の規則とその背景など、実際に業務を行う上で知っておくべき理論を学ぶ。		
講 義 概 要	図書館の資料を利用しやすくするためには、資料の組織化と呼ばれる作業が必要です。この作業の柱となるのは、資料を主題内容によって分類して排列することと、タイトルや著者名など種々の手がかりから検索できるように目録を作成することです。この授業では、前半で目録、後半では分類を扱います。基本的に講義形式で行いますが、受講生の「なぜ」を大切にしたいと考えています。従って、質問大歓迎です。充実した、かつ楽しい授業をめざしたいと考えていますので、内容はどうしてもよくて単位さえ取ればよいという気持ちの人はこちらからお断りします。		
使 用 教 材	テキスト	特に使用しません。	
	参考文献	柴田正美著「資料組織概説」日本図書館協会（JLA 図書館情報学テキストシリーズ9） 志保田務・高鷲忠美「資料組織法」第3版 第一法規 堀込静香ほか「パソコン演習資料組織」日本図書館協会 その他、初回の講義時に指示。	
評 価 方 法	出席、授業への参加度、定期試験を総合的に加味して行う。		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	実際に図書館で、目録を検索した経験があることが望ましいので、特にそういった経験に乏しい人は大学や地元の図書館を利用して経験を積むようにしてください。		

年 間 授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 授業の進め方 文献紹介 2. 図書館における資料の流れと組織化 目録とは 基本的な用語の説明 3. 目録の歴史 メディアの歴史と目録形態の歴史(冊子体、カード、コンピュータ目録等) 4. 図書館の書誌的構成 書誌記述に必要な分析 5. 目録規則とは 概要 歴史 NCR(日本目録規則) AACR(英米目録規則) 6. アクセスポイント 標目と排列 典拠コントロール 標目指示 7. 目録のコンピュータ化 共同目録作業 標準化 書誌ユーティリティ 8. 分類法の概説 分類の意義 分類・件名・キーワード 9. 区分と体系化 区分の原則(排他性、網羅性) 体系化(構造、排列、記号化) 10. 分類法の種類と歴史 NDC(日本十進分類法) 11. 主題分析 キーワードと主題 件名標目表 シソーラス 12. まとめ
----------------------------	---

科 目 名	資料組織演習（後期）	担当者名	松 山 巖
-------	------------	------	-------

講 義 の 目 標	資料組織概説で修得した知識に基づき、実際の組織化の方法を身につけるための演習を行う。		
講 義 概 要	前半は目録の作成、後半は分類作業。本来なら実物の資料（図書など）を用いて行いたいところですが、なかなかそうもいかないので、標題紙や奥付、目次などを抜き出したプリントを配布して行うことになるでしょう。目録、分類とも一定のルール（目録規則および分類規則）に基づいて行うので、数多くの規則が出てきますが、単なる棒暗記にならないよう心がけ、ルールの裏にある歴史・事情など、規則の存在理由をできるだけ考えながら進めていきます。毎回、演習をしていくうちに、書店で本を手にしながらふと「サブタイトルはどこからかな」「主題は何だろう」などとつぶやいてしまうようになったら、しめたものです。		
使 用 教 材	テキスト	吉田憲一編著「資料組織演習」日本図書館協会（JLA 図書館情報学テキストシリーズ10）	
	参考文献	授業で指示します。	
評 価 方 法	出席、授業への参加度、定期試験により総合的に評価します。		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	規則だけ知っていても、資料の組織化はできません。知識の宇宙に向かって心を開いておくことと、好奇心と常識が大切です。また、演習ですので、積み重ねも大切です。欠かさず出席しましょう。		

1. オリエンテーション
授業の進め方 文献紹介 書誌情報とは
2. 書誌記述 (タイトルと責任表示)
3. 書誌記述 (版・出版・形態・シリーズに関する事項)
4. 書誌記述 (注記・ISBN)
アクセスポイント(標目、標目指示、排列)
5. 目録演習
6. 目録演習
7. 目録演習
8. 分類法 (NDCの原理、構成;本表と関連索引の使い方)
9. 分類法 (補助表の使い方)
10. 分類演習
11. 件名目録
基本件名標目表(BSH)の使い方
12. 総合演習

科 目 名	児童サービス論（後期）	担当者名	小 川 剛
-------	-------------	------	-------

講 義 の 目 標	<p>基本的には、文化的に充実した児童期を過ごすことで、将来のよき社会人そして図書館利用者の形成を目指して行われる公共図書館で行われる子どもを対象に行われるサービスについて述べる。また、子どもたちをめぐってさまざまな読書・文化活動も行われているが、それらについて理解も深める。</p>		
講 義 概 要	<p>児童サービスの発達、児童文学を中心とした児童資料、児童を対象とする様々な活動を具体的に述べるとともに、より充実した児童サービスの実現のための諸活動についても述べる。</p>		
使 用 教 材	テキスト	堀川 照代『児童サービス論』 日本図書館協会、1998年	
	参考文献	適宜指示	
評 価 方 法	学年末試験あるいはレポート		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	児童図書館（多くは、公共図書館児童コーナー）を活用してみること。児童文学に親しむこと。		

1. オリエンテーション - 児童サービスの根底にあるもの
2. 児童サービスの歴史
3. 児童サービスの意義
4. 児童資料の特色と選択
5. 児童コレクションの形成と管理
6. 児童サービスの内容(1)
7. 児童サービスの内容(2)
8. 児童サービスを拡げるもの
9. 児童サービスの展開
10. ヤングアダルト・サービス
11. 地域・各種機関との連携
12. まとめ

科 目 名	図書及び図書館史（後期）	担当者名	高 野 彰
-------	--------------	------	-------

講 義 の 目 標	<p>図書や図書館がどのように変遷をして現在に至っているかを知り、将来を展望できるような基本的な知識を習得できるようにする。</p>		
講 義 概 要	<p>図書とはどんな形を持ち、どのようにして作られ、どんな役割をはたしてきたのか。そして図書の集合体であるコレクション、即ち図書館は集合化したことによってどんな機能が生まれ、種別化されたのか。又、図書館員（司書）はどんな目的で集合化をはかったのであるうか。これらの諸点を複合的にとらえて学習すると共に、図書史については、できるだけ実物に触れたり、写真等を用いて目で体得できる機会を多くする。</p>		
使 用 教 材	テ キ ス ト	使用しない	
	参 考 文 献	<p>図書館史 藤野幸雄『図書館史・総説』勉誠出版 1999 244P 2200円＋税</p>	
評 価 方 法	<p>期末試験と期間中のレポート 出席状況</p>		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど			

年
間
授
業
計
画

1. 古代の図書、図書館
2. 中世の図書、図書館
3. 近世の図書、図書館
4. 19世紀の図書、図書館
5. 20世紀の図書、図書館

科 目 名	コミュニケーション論（前期）	担当者名	町 田 喜 義
-------	----------------	------	---------

講 義 の 目 標	「コミュニケーション」の概念を理解し、それを方法論として自己の発見や認識に役立てることができる。		
講 義 概 要	<p>使用テキストの目次を列挙しておく。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ひとつきあいがうまくいかない症候群 2. ヒト（ホモ・サピエンス）とコミュニケーション 3. 対人関係とコミュニケーション 4. 自分を知るコミュニケーション--人との出会いは新しい自分との出会い 5. どうなってる、現代日本人の人間関係？ 6. どうすればいい、これからの日本人の人間関係？ 7. コミュニケーションの新しい認識--考える人間をつくる 8. 異文化と出会って自己を成長させる <p>受講生数によってグループ討議・発表などを採用する。</p>		
使 用 教 材	テキスト	宮原 哲（2000）『コミュニケーション最前線』松柏社 ￥2,500	
	参 考 文 献	開講時に別紙配布する。	
評 価 方 法	<p>出席回数：15%（欠席2点、遅刻1点減点）</p> <p>レポート：40%</p> <p>定期試験：45%</p> <p>OHP作成：10%（ボーナス点）</p>		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	テキストの下読みをすること。		

1. 急激な世界・社会の変化
2. 「人生は友」--ネットワーキング
3. 理論 実践
4. ぎりぎりの人間関係における異文化
5. コミュニケーションは異文化間コミュニケーション
6. co-culture (共文化) を再確認する
7. コミュニケーション能力
8. 外国語習得
9. 個の確立
10. 他民族・多文化事情
11. 日本を知るプログラム--カナダの事情
12. まとめ

科 目 名	情報機器論（前期）	担当者名	松 山 巖
-------	-----------	------	-------

講 義 の 目 標	情報のデジタル化に関する基礎知識を学ぶ。		
講 義 概 要	<p>コンピュータ = 電子計算機はその名のとおりに計算をする機械であるから、数値データを扱うようにできている。一方、人間が扱う情報は文字や音声、画像、動画など多種多様である。しかし、これらの情報も数値に変換（デジタル化）してやることで、コンピュータは情報処理機器に変身するわけである。本講義では、その中でも文字情報を数値化する方法（文字コード）を中心として、各種の情報のデジタル化のしくみや問題点について学ぶ。さまざまな入出力機器や情報蓄積媒体、またインターネットをはじめとするネットワークとの関りについても時間の許す限りふれたい。全体に、ある程度技術的な話が中心となるであろう。</p>		
使 用 教 材	テキスト	田畑孝一編「情報機器論」東京書籍（新現代図書館学講座16） 随時プリント配布。	
	参考文献	講義で指示。	
評 価 方 法	出席及びレポートの予定です。		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	実際にコンピュータにふれながらの授業が望ましいのですが、時間・設備の関係上、残念ながら困難だと思われます。他の授業や自学自習等で適宜補って下さい。		

年 間 授 業 計 画	<p>(およその目安です。)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション 授業の進め方 参考文献 2. コンピュータにおける数値の表現(2進数、ビットとバイト等) 3. 文字コード概説 4. 日本語のさまざまな文字コード、いわゆる文字化けなど 5. 外国の文字コード、異なる文字コードの切替え(エスケープシーケンス, WWW 方式等) 6. 多言語環境の実現 7. 文字コード論争(Unicodeなどをめぐって) 8. 音声のデジタル化 9. 画像、映像のデジタル化 10. 図書館システムの機械化(コンピュータ化) 11. 図書館システムの今後 12. まとめ
----------------------------	---

科 目 名	図書館特論（前期）	担当者名	福 田 求
-------	-----------	------	-------

講 義 の 目 標	<p>各種図書館において、インターネットをはじめとするネットワーク上の情報サービスが始められている。このサービスの数は増えつつあり、また内容的にも高度なものになってきている。今後、図書館員あるいは何らかの情報サービスに携わる者には、ネットワーク情報資源を構築したり利用したりする能力が当然求められていくことになるだろう。本講義ではインターネット上の情報資源の中でも特に WWW に注目し、これについて受講者が理解を深められるようにしたい。</p>		
講 義 概 要	<p>講義前半ではインターネット、WWW、HTML、（URL を含む）URI 等の基本的な概念について解説する。また、WWW による情報資源の具体的な構築方法も紹介しつつ、講義後半においては、受講者各自の選んだテーマにしたがって、Web ページ作成の実習を行う。</p>		
使 用 教 材	テキスト	指定しない。	
	参考文献	適宜指示する。	
評 価 方 法	作成された Web ページとレポートの評価。		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	<p>受講希望者数が教室の定員を万一超えた場合は抽選を行うので、登録手続について司書課程のオリエンテーションや免許課程係窓口で注意事項をきちんとチェックすること。</p>		

1. 受講者の確認・決定。年間予定、授業方法等について説明。
2. インターネット、WWWの仕組み
3. インターネット上の情報資源・サービス（電子図書館、検索エンジン等）
4. インターネット上の諸問題（情報倫理、著作権等）
5. Webページの作成：内容（テーマ）と形式（Webページの構成）の決定
6. Webページの作成：テキスト
7. Webページの作成：静止画像
8. Webページの作成：音声
9. Webページの作成：動画
10. Webページの作成：CGI他
11. Webページの作成：受講者による相互批評等
12. まとめ

科 目 名	学校経営と学校図書館（前期）	担当者名	小 川 剛
-------	----------------	------	-------

講 義 の 目 標	<p>学校図書館の理念と教育的意義とを、生涯学習体系下にあるものとしてとらえ、「生きる力」「自己教育力」の形成という観点から、それらを述べる。学校図書館は、児童・生徒という著しく発達する時期にある存在を対象に教育を施す学校に付設されるものであるから、その点に留意し、学校経営と関連させながら、その運営のあり方を述べる。</p>		
講 義 概 要	<p>生涯学習体系下での学校のあり方、教育課程の検討、そして、その実現のため各種資料を備えた学習センターとしてのあり方を図書館経営の観点からみていく。</p>		
使 用 教 材	テキスト	なし	
	参考文献	<p>司書教諭コースを履修する学生は、下記資料をもつこと 全国学校図書館協議会編『学校図書館・司書教諭講習資料』同会、1999年</p>	
評 価 方 法	<p>期末試験</p>		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	<p>資格取得コースであることを自覚して受講すること</p>		

1. オリエンテーション、生涯教育、学習思想の成立 - フランス、ユネスコ
2. 生涯教育、学習思想のわが国への導入
3. 生涯学習体系下の学校教育の在り方(1)
4. 生涯学習体系下の学校教育の在り方(2)
5. 生涯学習体系下の学校教育の在り方(3)
6. 「生きる力」を育む学校図書館のあり方
7. 学校図書館の組織と運営
8. 学校図書館の資料
9. 学校図書館環境のあり方とその整備
10. 地域のなかでの学校図書館
11. 司書教諭の任務と役割を考える
12. まとめ

科 目 名	学校図書館メディアの構成（前期）	担当者名	小 川 剛
-------	------------------	------	-------

講 義 の 目 標	<p>学校図書館の質は、その所蔵するメディアの量と質、そしてその整理状態によって決まる。本講義では、それらのメディアの種類と特質、その選択による構成、そして、いつでも利用できるような態勢にしていくことについて述べる。いわゆるブック・オンリーではなく、各種メディアについても眼を向けていく。</p>		
講 義 概 要	<p>まず、学校図書館が所蔵すべき各種資料について、ついでその収集ならび整理の仕方について実践的な作業を含めて指導する。</p>		
使 用 教 材	テキスト	未定	
	参 考 文 献	適宜指示	
評 価 方 法	<p>期末試験ならび実技作業の成績</p>		
受 講 者 対 する 要 望 等	<p>実務的なことを伴うことから欠席しないこと</p>		

1. オリエンテーション - 学校図書館メディアの教育的意義
2. 学校図書館メディアの種類と特性
3. 学校図書館メディアの選択と構成
4. 学校図書館メディアの組織化
5. 目録法および目録の作成(1)
6. 目録法および目録の作成(2)
7. 目録法および目録の作成(3)
8. 分類法(1)
9. 分類法(2)
10. 件名法
11. ファイリング・システム
12. まとめ

科 目 名	学習指導と学校図書館（後期）	担当者名	小 川 剛
-------	----------------	------	-------

講 義 の 目 標	<p>子どもたちの個性に見合った実質的な学力の形成をめざす動きが、学校図書館を生んだ。今日、学校図書館は、成立期の理念を現代社会に活かすべく新たな課題に取り組んでいる。それはメディア活用能力の形成ということであり、その意義と具体的な育成方法について述べる。</p>		
講 義 概 要	<p>まず、学校図書館成立の問題を学習指導の側面から、追究し、その本質を明らかにする。そして、その今日的な展開としてメディア活用能力の形成をとらえる。さらに学校図書館において、実際に行われている活動を概観する</p>		
使 用 教 材	テキスト	未定	
	参 考 文 献	適宜指示	
評 価 方 法	期末試験		
受 講 者 対 する 要 望 等	自分の学校図書館体験を掘り起して、再検討してほしい。		

1. オリエンテーション
2. 学習指導の歩みと学校図書館の成立
3. 主体的学習とメディア活用能力の形成
4. 教員に対する支援と働きかけ
5. メディア活用能力育成の計画と方法
6. メディア活用能力の具体的展開(1)
7. メディア活用能力の具体的展開(2)
8. 学校図書館における情報サービス(1)
9. 学校図書館における情報サービス(2)
10. まとめ

科 目 名	読書と豊かな人間性（後期）	担当者名	小 川 剛
-------	---------------	------	-------

講 義 の 目 標	<p>人間の特性として、ことば、文字などの記号を駆使して、コミュニケーションを行い、社会的生活を創っていくことが、人間としての基本的な能力とされる。本講義では、人間として生きる基本に求められる、ことば、文字等によるコミュニケーション能力―リテラシー―形成をめぐる問題を、さまざまな面から検討する。この原点ともいうべき、本来のリテラシーの確立は現代社会の求めるコンピュータ・リテラシーあるいは情報活用能力の基盤であり、人間の「生きる力」の重要な側面であることをあきらかにする。</p>		
講 義 概 要	<p>まず、人間とはどのようなものかを、「人間性の形成」という観点から検討する。そして、ことば、文字などを中心とする記号を使ってコミュニケーションしながら生活するという人間の特性に着目し、人間にとって読書がもつ意義を確認する。読書をすすめていく能力の形成過程を理論的にあきらかにするとともに、実践面での読書指導のすすめ方を示す。そのような読書推進活動は、教員の多面的な活動によってすすめられるものであり、その内容を目的と実践の両側面からみる。最後に本教科「読書と豊かな人間性」を、中央教育審議会の文書などの検討により、その意義を確認する。</p>		
使 用 教 材	テキスト	なし	
	参考文献	授業中に適宜指示。	
評 価 方 法	期末試験		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	<p>資格取得コースであるから、受講者は積極的に、知識・技術の取得に励んでほしい。資格は、実力の裏付けがないと通用しない。</p>		

1. 人間性の形成過程--その 1
2. 人間性の形成過程--その 2
3. 人間と読書
4. 読書力の形成
5. 読書指導のすすめ方--その 1
6. 読書指導のすすめ方--その 2
7. 読書推進活動と教員の責務
8. 「豊かな人間性」をめぐる問題
9. まとめ

科 目 名	情報メディアの活用（後期）	担当者名	福 田 求
-------	---------------	------	-------

講 義 の 目 標	<p>学校教育においてその重要性が再認識され新たな役割を担うことが期待され始めた学校図書館における多様な情報メディアの特性と活用方法の理解を図る。</p>		
講 義 概 要	<p>まず、現在までの情報メディアの発達と変化を検討することで、現代社会が高度情報社会であることを確認し、その社会の中でどのように人間が位置づけられるのかを講じる。また、各種情報メディアの特性について概観した後、学校教育の目的や状況に応じてどのようなメディアを選択すべきかも考察する。次に、視聴覚メディア、教育用ソフトウェア、データベース、インターネットといった各ツールごとにその活用方法について、学校教育との関わりを見ながら、具体的に論じていく。そして最後に、学校図書館メディアと著作権の関わりを講じ、また、講義全体のまとめを行う。</p>		
使 用 教 材	テキスト	指定しない。	
	参 考 文 献	適宜指示する。	
評 価 方 法	レポート / 学期末試験。		
受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど	<p>受講登録においては授業が始まる前の段階で抽選を行う場合があるので、抽選や登録の手続には細心の注意を払うこと。抽選がある場合は、抽選を受けていない者および抽選に落ちた者の登録は原則認めない。</p>		

次のような項目について順次論じていく。

1. オリエンテーション：年間予定、授業方法等の注意事項について説明。
2. 高度情報社会と人間。高度情報社会と学校教育。
3. 情報メディアの特性と選択。
4. 学校教育における視聴覚メディアの活用。
5. 学校教育におけるコンピュータの活用。
6. 教育用ソフトウェアの活用。
7. データベースと情報検索。
8. データベースと情報検索：学校教育との関わりから。
9. インターネットによる情報検索と発信。
10. インターネットによる情報検索と発信：学校教育との関わりから。
11. 学校図書館メディアと著作権。
12. まとめ